



始





264-21



5

の  
光

稻  
毛  
詛  
風  
著

大正  
5. 10 10  
内交



## 序

教育者の眠は餘りに長かつた。けれども其の眠から覺むべき時が遂に來た。——「教育者自覺」の警笛は四方にこだまして曉明に近い教育界の全野にけたましく響き亘つた。その響きを聞いて或る者は周章てて飛び上つた。そして飛び上り過ぎたので直ぐ又そこにバタリと倒れた。或る者は馬車馬のやうに驀直に只前へ前へと駆け出した。そして力が盡きたので間もなく中道に倒れた。或る者は足の向き次第に駆け廻つたが行くべき方向を失つて小さな岐路の前に立ち竦んだ。或る者は大勢が餘り立ち騒ぐのを見て一寸妙な氣になり



二三歩戶外に出て見たが急に馬鹿らしくなつて直ぐ引つ込んでしまつた。或る者は周囲の騒擾に温い夢を破られたが根が不精なために一寸頭を擡げて見ただけで直ぐまた眠に落ちてしまつた。或る者は騒を知りながら目さへ開かずにしてまた眠りもやらずにぐづくと床の中に蠢動して居た。

新時代の黎明は近づいたのだ。自覺の警笛は鳴つたのだ。けれども教育界の何人かまたこの黎明に對する十分な準備とこの警笛に對する本當の覺悟とをなし得たであらう。騒擾は甚だしかつた。大抵の人は一度は起つた。少くとも一度は起たうとした。けれどもそれは果して彼等に何を與へたであらうか。曉明の警笛はやや夙きに過

ぎた。やや急激に過ぎた。多くの教育者は兎に角目覺めた。けれども彼等には起つて直ちに働くだけの準備はなかつた。彼等は空腹であつた。彼等は薄着であつた。彼等は寢不足であつた。彼等は未だ疲労して居た。斯くして立ち上つたものも驅け出したものも、倒れるかさうでなければ路に迷ふに過ぎなかつた。否、斯くして彼等は寧ろ自覺の警笛を吹き鳴らした人を恨んだ。警笛に驚いて飛び立つたり飛び出したりした自分を冷笑した。稍あつて、彼等は心の動搖が靜まると甚だしく空腹を感じ寒さを感じ疲労を感じ出した。そして遂に警笛を忘れ、警笛に驚かされたことを忘れて、ひたすら空腹をうつたへ、寒さをうつたへ、疲労をうつたへるやうになつた。而



かもこの醜劣なりつたへは、美しい名の下に東西に喧傳した。――

「教育を尊重せよ！」「教育者を尊重せよ！」

この美しい絶叫にかくれた醜劣な心事を見て驚絶したのは、警笛の吹き手であつた。彼は嗟嘆した。――こんな筈ではなかつたのに！

笛吹は本當に曉明が近づいたと感じたのである。本當に教育者の覺醒を必要と感じたのである。本當に教育者の眠が餘りに長かつたと感じたのである。勿論彼は眠れる人たちの空腹をも知つて居た。薄着をも知つて居た。寢不足をも知つて居た。疲勞をも知つて居た。けれども彼は彼等にこれを充たさせるよりも一層大切なものがある

欠



# 欠

まで来たのである。勿論私は今日磐石のやうな安立境を獲たとはいはない。只何となく其れに就いての曙光を獲たやうにだけは思はれるのである。本書『沈黙の光』が世に出るやうになつたのも、結局はこのかすかな信念が根柢となり原因となつたのに他ならない。本書の中に少しでも教育者諸氏に對して力とか光とかを與へることが出来るものがあるならば、いふまでもなくそれはやがて私の心中に開拓した安立境の眞實性から生れて来たものである。

我國の教育界は、今や革新の時期に遭遇して居る。随つて教育界の大問題は甚だ多いけれども私が目下教育界の最大問題と思ふこと



は學制問題でも教科書問題でもなくて、寧ろ教育者が眞の安立境を得て居ないといふことである。蓋し、教育者が本當の安心を得て教育に従事するのでなければ、たとひ如何程制度や設備を完美ならしめても、到底十分な教育の改善が望まれないからである。そして本書は主としてこの點を目的として書かれたものである。或は其の形式が文學的であるために、これを以て銷閑のすさびとでも思はれるやうなことがあるならば、著者の不幸はこれより甚だしいものはない。そしてこの點は苟くも本書のどの一章でも本當に眞面目に熟讀された人の何人も直ちに首肯する所であらうと信ずる。

本書の主人公は勿論假想人物である。けれども其の内面生活は私

自身の内生活である。即ちその事實は數年前の事のやうに描かれてあるが、實は私目下の内生活の告白に他ならないのである。そしてこの點も亦少しく聰明な讀者の直ちに理解する所であらうと思ふ。

私は本來都會地の教育殊にその初等教育と教育者とに對して甚だしい不満をいだいて居るものである。極言すれば大きな都會地に於ては、本當の意味の教育が容易に出來ないと共に、本當の意味で教育者の安立境を見出すことが容易に出來ないと思ふものである。私  
が本書に於て、都會地の教育や教育者を非難して居たのも、蓋しこの見地を根據とするものである。但し、私は勿論都會地の教育者に



對して、本書の主人公と同様の要求をしようとするものではない。只私は何にも知らずに、餘りに不當な要求を懷いて都會地に出る教育者が日増しに多くなつて行くことを見るに堪へない者である。希くば形式のために私の本志が没却されないことを望んで止まない。

私は「愛」を以て極めて大きな道德であり殊に教育者にとつては最も大切なものであると信ずるものである。そして私から見れば、愛の極致は「二人を完全に愛すること」に存するのである。本書は、この見地を一根柢乃至一中心として居る。但し、嚴密にいふ「愛」の本義については本書の中で詳述する餘地がなかつたから、若しこの點

に關して疑問を懷かれた方は、小著「愛し得ざる悲哀」を精讀して戴きたい。尙教育者の自覺とか煩悶とか修養とか乃至は眞生活とかいふ事に關する著者の詳細な見解を知らうとせらるゝ方は、小著「若き教育者の自覺と告白」及び「現代教育者の眞生活」を讀んで下さい。

歐洲大戰が次第に結末に近づきつゝある結果として最近「戦後の教育」といふ言葉が諸所に散見するやうになつて來た。古今未曾有の大戦の後に處するためには、我が國の教育界も各種の改良革新を要することは勿論である。併しながら、教育の中心は人——教育者にある。随つて私のこれまで反覆絶叫した様に、あらゆる教育の改



善革新は教育者をよくすることにあり。そして、良教育者とは、單に學術の力が優等であることだけではなくて、教育者としての高い理想を持ち、教育者としての熱烈な誠意を持つて居ることである。教育のために殉じようとする熱情を持つて居ることである。喜んで教育のために殉ずることの出来る磐石の安立境を持つて居ることである。眇たる「沈黙の光」一卷が、聊かにてもこの點に對して貢獻する所があるならば、著者の喜はこれに加ふるものがない。

大正五年九月二十三日夜半雨の音を聞きつつ

東都向陽臺の寓に於て

詛風生識す

沈黙の光 目次

一	虫時雨	一
二	目覺め	六
三	愛	二九
四	生か死か	四七
五	黎明	七〇
六	贖罪	八九
七	勝利	一〇二
八	眞實	一二〇



九 沈黙の權威……………一四四

十 復活……………一七一

附録

一 自覺の意義及び價值……………一九五

二 生みの力……………二三

三 教育上の功績とは何ぞや……………三三

沈黙の光

稻毛 詛風 著

虫時雨



多年心交せる友人に裏切られたやうな寂寞と悲哀とが、竹島訓導の身に一ぱいになつた。高潔な志望と覺悟とをいだいて師範學校を卒業してから七ヶ年、その間に得たものは僅かにはかない幻滅の悲哀に過ぎないとは、ああ何といふ悲しい報酬であらうか。併し、たとひ幻は消滅したことが動かすべからざる事實であるとしても一度高潔な志望を懐いたことも亦たしかに事實である。然り、彼れも事實でありこれも事



實である。七ヶ年の日子は、この相矛盾する二つのものが共に眞實であることを教へた。其處にまじめに考ふべき疑問があるではないか。

彼は兩戸を排して裏庭に出た。悲しい秋は今や酣である。生の無常を嘲つかとも思はれる虫の音は、時雨のふり注ぐ如くであつた。彼は露に濡れたベンチに力なく腰を下した。

彼は今日學校での出来事を廻想した。そして彼は何よりも先に校長を始め同僚の虚偽な不誠實な態度を憤慨せずには居られなかつた。勿論磯田が月岡をなぐつたに相違ない。月岡に傷を負はしたに相違ない。そして其のことは小學生としては許すべからざることに相違ない。けれども磯田が月岡をなぐつたり傷を負はしたりしたのは、月岡が磯田を侮辱したからではないか。父親の權威をかさに着て、貧乏人を見下げる傲慢横暴な月岡の心持や態度やが正直な生一本な磯田を怒らしたのではないか。

そして見れば、罪は寧ろ月岡にある。少くとも磯田にあれ程重い罰を科する位なら月岡も同罪に處すべき筈ではないか。それを三十人の同僚中誰一人私の月岡懲罰説に賛成するものがないとは何といふ馬鹿げたことであらう。正邪善惡の極めて明白なこの一事に於てさへも、自己の所信を貫徹しようとするものが三十人の職員中只の一人もないといふのは何といふ情ないことであらう。自己の信念に忠實であるよりも校長に雷同しようとする彼等、正義であつてもそれが貧乏人の子であるといふがために其の不幸を何とも思はないかはりに、憎むべき精神を持つたものもそれが威勢のよい市學務委員の子であるといふがために依怙の沙汰に出でて平然たる彼等の有様は何といふ醜いことであらう。只一人の子をすら眞實に愛することが出来ないにも係らず、教育者の生命が愛だとか凡ての教へ子を皆平等に愛するとかと揚言して居るのは何といふ恐ろしい



虚偽であらうか。正邪の極めて明白なたつた二人の子を裁断するに際してさへも正を正とし邪を邪とすることが出来ないやうな劣弱な身でありながら、自己に誠實だとか徹底だとか真剣だとかいつて居るのは何といふ矛盾であらうか。職員會議といふやうな公明正大を標榜する場合に於てさへ、彼等は只偏に自己の低級な利益といふことにのみ腐心して居る程だから、其の他の場合に於ける彼等の言動が如何に醜陋であるかは想像に難くはないではないか。

彼はかう思ふと、現今の教育といふもの教育者といふものが今更ながら虚偽と矛盾とに充ちて居ることに思ひ到つて慄然として恐れを感じない譯には行かなかつた。其の刹那彼は他人を悲難して居る自分自身を省みた。そして、「おまへはどうだ。おまへは果して他人を悲難するだけの十分な資格を持つて居るのか。」かういふ叫びがどこからとも知らずに、

權威あるものゝ如くに彼に肉薄して来るやうに感じられた。彼は恰かも眠れる自然に對してさへ恥ぢるやうな心持であたりを見廻した。そして彼には虫の音は更に一段の哀愁を増したかのやうにも感じられた。と、高く澄み亘つた天空の一角から星が一つ流れて遠く彼の郷里の方に消え去つた。彼はふと自分の少年時代を思ひ出した。



## 二 目 覺 め

彼は或る小さな村の中農の長男として生れた。彼は幼時より學校の成績はよかつた。彼は田畑を耕すよりも本を讀むことが好きであつた。そのため高等科を終る頃には理解のない無學な兩親と衝突が斷えなかつた。小學校を卒業する頃には、彼の決心は師範學校入學に傾いて居た。で卒業すると間もなく彼は兩親を説いて郡立準教員養成所に入つた。其處で性來情熱的な彼の心はベスタロッチの傳記に接することに依つて終生消えない程強烈な感激を覺えた。彼は少年ながらに、高潔な覺悟と興味とで養成所を出て自分の村に奉職することとなつた。この時には彼の兩親もはや不平がましいことはいはなかつた。彼は幸福に一ケ年の月日を過して希望を懷いて師範學校に入學することになつた。學術も品性

も人並優れた彼は茲にも亦大した不平を見出すことなしに三年に近い日子を闊した。

けれども、やがて人生の危機が近づいた。彼は外には狂奔する新時代の思潮に刺戟され、内には頓に變化する精神生活の成長に連れて、深く自己を反省する身となつた。それは丁度三年級から四年級に移る頃であつた。

彼はこれまで親しんだ運動具や樂器等を見捨てて、圖書室の中に閉ぢ籠つたり、裏庭の芝生の上に只一人寝ころんで天驅ける雲の行衛に無限の感慨を行つたりする日が多くなつた。彼の自我が豁然として目覺めて來たのである。

彼は靜かに自己を顧みた。彼は墮性と因襲とに従つて盲目的に規則に服従して來たこれまでの自分の生活をしみじみと恥ぢるやうになつた。



人一倍の試験勉強によつて得たこれまでの自分の席次が馬鹿げたものに見えるやうになつて來た。そして彼はその度毎に心の中でかう叫びた。

——俺は學者になるんじゃない。俺は本當の教育者になるんだ！

彼はこれまでとても本當の教育者になることを目的として來た。けれども彼は未だ本當の教育者といふものを知らなかつた。彼は未だこれについて根柢的に考へようとさへもしなかつた。彼は勿論ベスタロチを知つて居た。けれども、彼がベスタロチについて知つて居る所は只その傳記や事蹟だけで、彼の本當の心持、本當の人物、本當の教育者としての價值ではなかつた。要するに彼は只因襲的な意味で理想的教育者といふものを考へて居たに過ぎなかつた。——師範學校を優等で卒業して縣賞を貰ひ、縣下一流の學校に奉職して、めき／＼と昇給し儕輩を凌いで拔擢されて早く校長になる………といふ位のことしか見當がつかなかつた。

彼は今この事に思ひ當ると我ながら冷汗が流れるやうであつた。彼は本當の教育者にならうとして居るのではなくて只立身出世をしようとするのであつた。彼はこれを恥ぢこれを悔いた。これと共に、三年の間只の一度も只の一人も、本當の教育者の何ものであるか、本當の教育者になるにはどうすればよいかといふことを教へて呉れない師範學校といふもの、師範教育といふものを詛はしいものと思はれた。彼等は只知識の切賣をし、只申譯の訓話をすればよい。彼等は只生徒を粒の揃つたもの、悪いことをしないもの、表面だけ従順なものにさへ育て上げればよい。彼等は生徒を人間として教育せしめ、價值あるものにしようとするのではなくて教育を行ふに調法な道具器械にさへすればよい。彼等の喜ぶ所は試験の成績がよくて、温厚篤實なことである。彼等の恐れる所は教科書以外のものを讀んで自分達を意地目たり、自分達の考へることを強い



て避けて居るやうな重大な問題を眞面目に考へたりすることである。結局彼等は生徒の本當の自我を目覺すまいとするのである。……

彼はこれが何よりも嫌らなかつた。彼の望む所は薄つぺらな教科書の知識の暗記ではなかつた。生命のない教員心得の理解ではなかつた。藝人擬ひの實地授業の巧妙ではなかつた。磐石のやうな教育者としての信念、火のやうな教育者としての熱情、これが彼の衷心要望する所であつた。彼がベスタロッチに感激したのも、實はベスタロッチにこの二つの特徴が最も完全な形で體現されて居たからであつた。

けれども、彼は更に一步を進めて考へた。そして彼は信念や熱情は外から與へられるものではない。これを教師から與へられようと望んだのは自分の考が足りない、自分の誠意が足りないからだ、といふことを彼は悟つた。それにしても、彼は教師に對する不満を全く打ち消すことが

出来なかつた。

勿論信念や熱情は完全な形で與へられなくとも、信念や熱情に對する暗示や激勵だけは與へて呉れてもよいではないか。否教師自身が本當に確信と熱情とを以て自分の職務に忠實に従つたならば、必ず自分の生徒に、少くとも確信と熱情とを要望して居る生徒にだけは、暗々の裡に何等かの暗示と激勵とを與へなければならぬ筈ではないか。そしてこの暗々の裡の感化影響を他にして教育の力といふものも、教育者の價值といふものもあり得ないではないか。

かうして彼の態度は次第に變つて來た。彼は教室に居ても、教師の講義を眞面目に聞くよりも、教師の心中を推察することに一層多くの興味を感じた。そして、さうすればさうする程益々教師がつまらないものと思はれたし、随つて又益々教師の講義もつまらないものと思はれた。



やがて學年試験が來た。友人は皆熱心に試験勉強をした。殊に平生なまけて居るもの程熱心に勉強した。けれども、彼は友人からあやしまれるまでに冷静であつた。これまで級長で通して來た彼は勉強も人一倍熱心であつた。彼は自分が勉強家である許りでなく、人に對しても熱心に勉強をすすめた。然るに、彼はもうこれまでのやうに、教科書を十遍も讀んで得意になるやうな心持がなかつた。勿論彼は一通の勉強はした。けれども其の他は自分の好きなものを讀んだり瞑想に耽つたりして居た。彼の最近の心事を或程度まで理解して居る親友の小山も、流石に試験の成績を氣づかつて二三度忠告をして見たが、彼はいつも靜かな落付いた態度でかう答へるのであつた。

「勉強をさらふのではないが、勉強する動機を考へると恥しくて、無味早燥な教科書を成績のために十遍も讀み返すといふやうなことはもう

出來なくなつた。この頃の僕にとつては只の一分でも手段とか準備とかいふやうな時がない。其時其時が凡て目的だ。自覺しない中は兎に角、苟くも自覺した以上は自分を欺くといふやうな大罪を犯すことが出來ない。只の一分でも自分の本當の要求を裏切ることが出來ない。」彼は孜孜として試験勉強に尊い自分の心身を磨けて來た過去の自分を憐れむと共に、自分の目前の友人だけを憐れんだ。殊に彼は平生怠つて居ながら、今周章して勉強して居るばかりか、ひそかに不正な仕事をさへ企てて居る人達を見ると、寧ろ輕蔑せずには居られなかつた。流石に彼もこらへ兼ねて、こんなことさへいふことがあつた。

「點數は一點から百點までの差だ。人間の値打の差は無限だ。そして人間の本當の價値や差異が自分にさへわからないじゃないか。教師が出たために附けた僅かの點數の差をさも大切さうにして圓栗の背比べな



どをして得意になつて居るよりも、基督とか孔子とかいふやうな偉人の前に膝まづいて、頭も上らないやうな謙遜な従順な心持になつて居る方がどれ程修養になるか知れない。試験は只落第さへしなけりアよいんだ。そして習つたものの試験に落第するやうぢや木偶の坊だ。」

試験は済んだ。これまで主席を通して來た彼の席次は第三席に下つた。擔任教師が不審に思つて彼を呼び寄せて問ひ且諭した。けれども、彼の心も態度も至つて靜平であつた。で教師も遂に少し遺憾の氣味でかういつた。

「學校の成績が悪いと卒業してから損をするからしつかり勉強し給へ。」この言葉を聞くと竹島の目は異様にかがやいた。

「私が師範學校に入つたのは立派な教育者にならうと思つたため、決して只損得といふやうな考だけで入つたのではありません。ですから

こんどのやうに一番から三番に下り、平均點が去年より二點や三點減じても、私の人間としての價値は決してそれだけ減少したとは思はれません。先生の御教訓下さる御心持は有難う御座いますが、御教訓の御趣旨に従ふ譯には參りません。私は只私にとつて眞實だと思ふことをして行かうと思ひます。若しそれで私が社會の敗北者となるやうでしたら、私が悪いか社會がわるいかの二つ一つです。校則に違反しない限りは決して御心配下さいませんやうにお願致します。」

卒業の日は一日毎に近づくやうになつた。そして、彼は益々孤獨を愛し沈黙に耽る身となつた。彼は同級生が卒業の日を如何にも楽しさうに待ち兼ねて居るのを見ると反感を起さずには居られなかつた。「何を樂しみにし何を持みにして卒業の日を待つのか。」かう詰りたいやうに思はれてならなかつた。「教科書とノートと教員免許状とを無くしたならば、何



等誇るに足りず、恃みに足るやうな實力も人格も誠意も持たなくて學校を出て行くことが罪惡であり悲哀でなくて何であらう。」かうも詰つてやりたいやうに思はれてならなかつた。彼はかう思つて、卒業試験をひかへながらひたすら圖書室に入つて自分の好きなものに読み耽つた。

やがて最後の夏休みが來た。彼は郷里の人となつた。けれども、彼はいつもの休みのやうに旅行をしたり村の學校にオルガン弾きに行つたり、湯治に行つたりはしないで、裏二階の一室に閉ぢ籠つて専念に讀書に耽つた。そして彼は、讀書の數が殖えれば殖える程益明白に自分の弱小を自覺し、益々強烈に自分の弱小を恥ぢるやうになつた。而かも彼は尙精進の意氣を挫かなかつた。彼は大賢ソークラテスが自ら「我は無知なり」といつた心を解しようとして數日苦悶を重ねた。そして非常に弱小で居ながら未だ何等の矛盾も感ずることなしに「無知である」とも「愚者である」とも

いふことの出來ない自己を恥ぢた。有象無象の中で優等生氣取で居たこれまでの自己の無自覺を思ふと、彼は只冷汗を覺えるばかりであつた。彼は屹々として書を読んだ。

やがて休が過ぎて彼は學校に歸つた。そして間もなく「教生」となつて尋常四年に附くこととなつた。學友は皆嬉しさにそして得意さうにして、自分の受持の訓導の指導に従つて居た。けれども彼は快々として樂まなかつた。思ふ通りに讀書が出來ないのも其の一因ではあつたが、更に大きな原因があつた。けれども彼はそれを人に語らなかつた。只彼は時々「附屬小學校といふ所程非教育的な所がない」といふやうなことを打ち沈んだ調子で小山などに話して居た。

或る日のことであつた。批評教授が彼の番となつた。彼は熱心に教材を調べてから型の如く教授案を調製して指導訓導に提出した。訓導はこ



れを見ると直ぐに大きな聲で「これは餘りに簡單だ！」と叫んだ。さうして他の教生の書いたものを渡してそれに準じて書直すことを彼に命じた。彼は暫く沈黙して居たが、やがて静かに、けれども底力のある聲でかう答へた。

「先生！私は書き直すことが出来ません。私はこれで澤山だと思ひます。」すると訓導は半輕蔑した半憤慨したやうな態度でいつた。

「あなたが澤山だといつても私から見ると足りないから書き直しなさい。」彼は一層低い聲でいつた。

「私が授業するに必要だと認めただけを書いたのですから、それ以上は書けません。勿論詳しく書くつもりならいくらでも詳しくは書けますが、それは無駄な骨折だと思ひます。どうせ教案を見乍ら授業するのではありませんし、また其の場合でどんな臨機の所置を取らなくてな

らないとも限りませんから、私は自分の豫定の筋書だけ書いたのですから分だと思ひます。私が教案の奴隷になることが出来ないやうに、子供も教案の犠牲にすることが出来ません。若し授業がまづかつたら、それは教案を細かに書かない罪ではなくて私の教育者としての力が足りないためです。實地の授業を御覧の上に教案の價值を批評していただきたいのです。」

訓導は一層顔を曇らして「それぢやまアやつて見たまへ」といつた切り何もいはなかつた。

批評教授は非常な好成绩で終つた。「流石は竹島だ」かういふ叫びがそこで聞えた。小山は彼が便所に行く後を追つて来て、如何にも嬉しうに彼の肩を叩きながら「主事が非常に褒めて居たよ」と叫びた。けれども彼は嫣然ともしなかつた。



間もなく批評會が始つた。主事を始め訓導や教生が澤山一室に集つた。席が定ると主事は開會を宣してから教授者の挨拶を要求した。靜かに起つた竹島の顔は物凄じばかり蒼ざめて、さなきだに鋭い眼は一層の鋭さを加へ、小さいけれども引き締つた口元は堅い決心を語つて居た。鋭い眼は一座を徑捷く見廻すと、引締つた口下に心持微笑をたたへた。と例の靜かな調子で彼は語り出した。

「始めて批評教授をしたものとしての感想を述べさしていただきたい。」恰かも一座の許しでも乞ふかのやうに、かう言つて一寸息をついて又語り續けた。

「妙なことを申すやうですが、私は授業中の一時間只恐ろしい罪惡感に苦しめられて居ました。と申すのは、批評教授のために犠牲にされる子供等に濟まないといふことを感じたからです。本當に教育すること

が出来るといふ自信もなく、また本當に教育したい、教育しなくてはならないといふ熱情もなく、只自分の教授法の稽古をするために子供だちを道具につかふといふことは、私にとつては實にいほうやうのない苦しみでした。私は、平生授業する時にも相當の苦悶があります。それでも、平生はたとひ實力がなく人格が低くて教育者としての確信がなくとも、兎に角自分の全力を盡して教育に従事しようといふ熱情だけがあります。ところが今日は、この熱心に授業しようといふことよりも、寧ろ、うまく授業しよう、授業して見せようといふ下劣な心持が私を支配しました。私は子供を授業の道具に使つたばかりでなく、私自身をさへ授業の道具に使ひました。それが私にとつて何よりも悲しいことです。外のことなら兎に角も、無邪氣な子供を道具に使ふといふことは、人間として教育者として洵に忍びない罪惡です。そ



れも子供が知らないのなら兎に角、附屬の子供のやうに、普通の時間と批評教授の時間や參觀人のある時間との區別をようく呑み込んで居て、それ／＼相當の心持や態度で授業を受けるやうなすれつからしになつて居る子供に對しては尙更罪が深いと思ひます。この意味に於て、私は批評教授といふもの程罪惡なものはないと思ひますし、附屬小學校といふもの程非教育的な場所はないと思ひますし、また附屬小學校の訓導といふもの程非教育的なものはないと思ひます……」

茲まで回想して、竹島は七年前の當時の光景をまざ／＼と目に浮べた。そしてふと我に復ると彼は拳を固く握つて立つて居る自分を見出した。で半ば可笑しいやうな氣分でそこらあたりを見廻した。——夜は大部更けて來たらしい。そして水上山のあたりがぼんのりと明るみを帯びて來た。彼は月が上るのだなと思つた。彼はまた昔を思ひつづけた。

その夜も今宵のやうに月の美しい中秋の一夜であつた。——親友の小山が彼の晝間の態度を心配して寄宿舎の裏庭に連れ出して忠告をしたその夜は。激越した彼の告白は主事始め凡ての訓導に甚だしい驚駭と惡感とを與へて、批評會はそれなりになつて仕舞つた。そして一刻前の稱讚の聲は忽ち罵言嘲笑の辭と代つた。「危険思想」「哲學の中毒」「似而非自覺」この様な話が冷笑と憎惡の響を伴つて幾度も／＼繰り返された。けれども彼は平然と自修室に歸つていつものやうに讀書に耽つて居た。やがて夕食後彼は舍監室に呼び出されて一時間近く擔任教諭の説諭を受けた。けれども彼は何等の辯解もしなければ勿論謝罪もしなかつた。そして、彼は最後に、「先生の御厚意は有難いが、私は心に少しも疚しいことがありませんから何とも申上げやうが御座いませぬ」といつて靜かに自修室に歸つた。と小山は待ち兼ねたやうに彼を誘つて裏庭に出た。月の光は綾



瀬川の漣に白銀と碎けて虫は時雨と鳴いて居た。芝生の上に腰を下した若い二人の友は、月の光を浴び乍ら暫らく沈黙して互に顔を見合つて居た。小山には竹島の顔がいつもよりも蒼白いやうに思はれると共に、いつもよりもけだかく感じられた。そしてかういふ人を友達に持つたことが自分の幸福だとも誇りだとも思はれた。と、又かういふ人に忠告することが甚だ潜越のやうにも思はれた。で、彼はいつもの元氣にも似ず、静かな聲でかういつた。

「竹島君！僕は今夜實は君に忠告しようと思つて茲に来て貰つたんだが、君の確信のあるらしい顔を見ると、僕は忠告することが潜越なやうに思はれてならない。だから忠告はしない。その代りに僕に二言三言確答して呉れ給へ。いいだらうな？」

かういひ了ると小山は竹島の口元と目元に微笑の陰がただよふのを覺

えた。と、竹島は小山よりも一層低い聲で答へた。

「有難う。僕も君が僕の本當の心が解つて呉れたなら、勿論忠告などして呉れる必要がないだらうと思ふ。返辭ならばいくらでもする。さうたづねて呉れ給へ。」

「それを聞いて安心した。ではたづねるよ。」

かういつて小山は心持下を向いて考へ込むやうにしたが、直ぐに頭を上げて真ともに竹島を見た。

「第一に君が今日批評會でいつた事には、虚偽が交つては居ないだらうな？」

「少しもなら。」

「ぢア、若しもあのために何か所罰でもされるやうなことがあつたら君はどうする？」



「所罰をするといふやうなそんな馬鹿な譯がないと思ふが、若しそんなことがあるとしたなら僕は飽く迄も反抗する。そして若しも聞き入れられなかつたら、所罰を受ける前に僕は深く退校する。それまでの事サー」

聲はいつものやうに低かつたが、力と熱とで少しく震へて居た。そして空嘯いて美しくしい月の光に臆面もなく曝した顔には平和と安心の色調がこぼれる程ただよつて居た。これを見た小山はつと彼の側にすり寄つて竹島の手をしつかり握つた。そして叫んだ。

「竹島君！僕はもう何も言ふ必要はない！どうか男らしくやつて呉れ給へ！」

茲まで考へると竹島は周章して空を仰いだ。月はもう山の端をはなれて眠れる自然にその冷い銀の光を惜氣もなく投げかけて居た。彼は急に

悲しげな調子で「ああ、七年の日子の呪はしさよ！」とつぶやいた。そして恰かも月の光を恥ぢるかのやうにがつくりと俯向いた。足下の名も知らぬ草葉には露の玉が真珠のやうに燦いて居た。彼は心の底から悪感を覺えるやうに肩をすぼめて立上つた。そして屠所に曳かれて行く牛の歩みのやうな力のない足どりで我が舎の方に進んだ。



### 三 愛

竹島は自分の室に歸つた。暫らく腕を拱いて瞑想に耽つて居たが、やがて彼は何か決心がついたかのやうに、本箱の曳出を開けて其の底から半紙十枚ばかりを一綴とした書きものを取り出した。表紙には墨黒々と大きく「教育者の安立境」と書き、其の左の一段下の所に幾分小さい字で「卒業論文草稿」と書いてあつた。

この一冊は、竹島にとつてはかなりに大切なものであつた。彼は卒業當時は幾度もくゞこれを取り出しては読み返した。そして其の度毎に彼には教育者としての信念と熱情とが増して来るやうに思つた。けれども、彼の俸給が上り彼の地位が高まるに従つてこの一冊を読むことが少くなつた。そして遂には二月も三月も半年も一年も手に取らないやうになつ

た。勿論彼はこれをつまらないと思つたのではなかつた。只彼はこれを恐れたのであつた。これを書いた七年前の心持と今日の心持とが餘りに乖離し矛盾して居るのを苦しみとしたのであつた。彼がこの一冊を読むことが出来ないのは、實は自己の現在を正視することが出来ないためであつた。自己の現在の醜態を見るに堪へないためであつた。ところが今彼は一年半振でこれを手にする事が出来た。頁を手繰る指先は少し震へて居たと同様に、彼の心も亦少からぬ戦きを感じるのであつた。そして、彼にはこの静かな寂しい中秋の夜半にこの一冊を繙く自分の心を美しい尊いもののやうに思はれた。彼の目は涙ぐんで居た。彼の心は奇蹟を待つ前の様な緊張を覺えた。彼は静かに、「一語一句を味ひながら讀んで行つた。」



## 教育者の安立境

## (一)

天地は悠久である。自然は平和である。ひとり人生のみ何といふ矛盾に充ち、悲哀に充ち、不幸に充ち、醜惡に充ち、缺陷に充ちて居ることであらう。歴史を見よ、活社會を見よ、そして自己を見よ。「この世をば我が世とぞ思ふ望月の、缺けたることのなしと思へば」といふやうな圓滿具足な生活の幸福を心行く迄味到し得る人は果してどれ程あるであらうか。

金に飽く人はある。肉慾に飽く人はある。位人臣を窮める人はある。けれども、本當に幸福に飽く人は恐らくあるまい。たとひ幸福を衒ひ、満足を裝ふとも、それは只裏奥の苦悶懊惱を隠匿するための手段ではな

いか。否、たとひまた本當に幸福を味ひ満足を得て居るとも、いふ所の幸福満足は實は甚だしく低級下劣なものであつて、自分で幸福を感じれば感ずる程、満足を味へば味ふ程、益々本當の生活から遠ざかり、益々本當の自我を損傷するやうになる種類のものではないか。一度眞面目に反省すれば、幸福と思ふことそのことが不幸であり、満足と思ふことそのことを不満足と思はなくてはならないやうな種類のものではないか。

然り、人生は缺陷だらけである。生きること其のことが悲しいことである。いたづらに要求のみ強烈でありながら、而かも多くの人は其の百分の一をも實現することが出来ないやうな不完全な生活をつづけて行かなくてはならないことが不幸でなくて何であらうか。けれども、翻つて思へば、この不満があり矛盾があり缺陷がある所にこそ、實は人生の魅力があり生活の興味があるのであるまいか。何となれば人生乃至生活



の眞髓は、出来上つた完具した形で外から與へられる所にあるのではなくて、自ら進んで積極的に獲得し創造する所に存するからである。この意味に於て、生活は徹頭徹尾「努力」である。そしていふ所の努力とは、單に要求の事實化乃至理想の實現に伴ふ努力だけではなくて、強い要求を懐くこと其のこと、高い理想を建てること其のことが努力であるといふことをも含むものである。

## (二)

生活を努力と解するものにとつて最も忌むべきことは、人生に努力の餘地の少いといふことである。人生が完全であるといふことである。換言すれば、生活を努力と解するものは、人生が不完全であればある程益々これを完全なものとして行かうとする興味をそそられるのである。こ

の意味に於て、生活を努力と解するものは、やがて自己尊重の人である。自己熱愛の人である。彼は自己をはなれて人生一般を靜かに冷やかに鑑賞し研究しようとする傍觀者ではなくて、自己の人生の改善を通して自己の參與する人生全體の改善に應分の寄與貢獻をしようとする實行者である。彼は聰明を匿りとするよりも熱烈を喜びとするものであり、超越よりも慕進を選ぶものである。斯くして彼は斷えず自己の全力を以て事に當り、與へられた運命を開拓して新らしい天地を創造すると共に、斷えず自己其のものの本性をも成長せしめるのである。随つて、彼には勿論恵まれない自己を持つたことに對する不満はあり、心の欲する儘に努力の結果を獲得することの出来ないうらみはあるけれども、自己の實現と完成とのために斷えざる努力を爲して行くこと其のことに、即ち努力の過程其のものに幸福と満足とを見出して行くものである。何となれ



ば、「力の自覚」其のものが幸福であり満足だからである。この意味に於て人生に改善の努力の餘地があり、自己に改善の意志と能力とがある限り、彼は決して自暴自棄に陥る筈はなく、自己冷笑に墮する筈はなく、更に失望落膽に沈溺する筈はない。

## (三)

努力に人生の意義を見出し、力の自覚に自己存在の価値を感じるものは要求本位の人であり創造本位の人である。そして斯くの如き人にとつては、問題に大小の差別がなく職業に高下の階段はない。即ち問題を大きくするも小さくするも、または職業を高く見るも低く見るも、凡て皆自己主観の態度如何にある。小鼠を搏つにも全力を注ぐ獅子にとつて小鼠を搏つことは虎を打つことと同様に大問題である。そしてこの獅子の

やうに、如何なる表面的の小事に對しても自己の全力を注ぐことが出来る人のみ、始めて人生の真相と偉人の心境とを理解することが出来る。この意味に於て眞實に生きようとするものは、何よりも先づ凡てを「自己に求める」ことの必要と価値とを知らなくてはならない。

人生は戦である。圓滿完具の樂園は努力の根柢を得てのみ意味のある單なる豫想單なる理想に過ぎない。随つて戦ふことなくして、努力することなくして、人生に樂園を望むものは必ずや失望と悲哀とを獲るであらう。眞に人生の樂園を望むものは、戦に徹する外はない。併しながらいふ所の戦は、外形的の戦ではない。他人との戦ではない。現實我と理想我との戦である。假我と眞我との戦である。眞に生活の幸福と安立とを獲ようとするものは、この種の戦を通して、即ち斷えず生活意志を緊張し充實して、自己の力を最善に發動せしめること其のことに幸福と安



立とを見出さなくてはならない。苟且にも自己を偽らず、自己の最深要求に従つて断えず向上精進の生活を持続して行く所に幸福と安立とを見出さなくてはならない。一言にすれば、自己が自己を信じ、自己が自己を待み、自己が自己を愛することによつてのみ、幸福も安立も獲られるのである。この意味に於て、幸福や安立は求めて得べきものではなくて、期せずして到るべきものである。即ち断えず自己の最善を致し、常に自己の最深要求に従つてさへ生活すれば、自ら幸福や安立が来るのである。随つて、先づ自己の最善を致すことなくして幸福や安立を望むものがある。つたならば、それは正しく木に椽つて魚を求むるの愚と選む所はない。幸福を望むことなくして幸福を獲、安立を求めることなくして安立を獲る所にこそ人生の妙味があるのである。

(四)

翻つて思ふに、教育者は人の師表である。幼きものの師表である。心身共に幼弱なものの模範となり規準となり依憑となり先達となつて、彼等の人格と生活とに確實な根柢を與へることを職能とするものである。自己及び人生に對する信愛の念を固め、自己の是正と信ずる所に従つて直往邁進せしめるやうな人物を養成することを職能とするものである。然るに、人に信念を與へんとするものは、先づ自ら信念を持たなくてはならない。自ら信じ自ら恃んでこそ人をも信ぜしめ人をも恃ましめることが出来る。自ら五里霧中に迷ひながら、人に進路を示さうとするが如きことは、望んで得べからざることである。この意味に於て、教育者は何よりも先づ確乎たる信念を持つて居なくてはならない。換言すれば



教育者としての理想と教育者としての安心とを持つて居なくてはならない。蓋し理想なきものは他を導くことは出来ないし、安心なきものは他に信頼を與へることは出来ないからである。然らば、斯くの如き理想と安立とは何によつて得られるであらうか。

第一に、教育者は教育其のものの眞義及び教育者の天職と眞價とを十分に理解しなくてはならない。蓋し、對象を精確に理解することがなくては高大な理想が立つ譯はないからである。勿論教育といふものが眞に價値のないもの乃至價値の少ないものであるならば、これを理解することは却つてこれを輕蔑しこれを嫌惡する所以となるであらうが、教育にして價値がある限り、これを理解することはこれを好愛しこれを尊重することの原因となるものである。そして對象を好愛し尊重することは、やがてこれを改善しようとする意志を觸發するものである。斯くしてこゝ

に高大な理想が樹立されるのである。

生活の理想を樹立することは生活の安立を得ることである。生活に對して疑惑と不安とを懷くのは、畢竟するに、最高價値標準即ち理想が定まらないからである。將來行くべき道が明らかになり、自我乃至生活を統率し支配する價値標準が明らかになりさへすれば、確乎たる信念と充實した勇氣とで生活を進めて行くことが出来るのである。

然るに、一般教育者の現状を見聞するに、彼等の中には、教育乃至教育者の天職と眞價とを理解して居ないもの、否理解しようとはしないものが少くない。即ち、單に在來の因襲に従つて、教育者といふものは教育といふことを商買にして生きて居るものゝやうにしか考へて居ないものが少くない。たとひ表面的には一通りの理解を有し理想を有するとしても、この理解や理想は、單に理知上のものであつて、其の裏心に於



ては、この理解に裏切れるやうな分子が少からず存在するのである。そして其の大半はいふまでもなく物質的欲望である。名譽、地位、權勢、財産等に對する身分不相應な欲望が、教育者の信念と希望と勇氣とを打ち碎いて仕舞ふのである。そして凡そ教育者も人である限り、これらの欲望をいなくこと其のことを非難することは出来ない。只併し、教育者でありながら斯かる欲望の満足のみは生活の意義と價值と、随つて教育者としての安立を求めようとするものが矛盾であり不可能であることを指摘しなくてはならない。蓋し、教育者の眞生活は、随つて本當の安立はこの方面にあるものではなくて、寧ろ他の一面即ち精神生活の一面にあるものだからである。

物質的薄遇を冷笑し、物質的缺乏を超越してのみ教育者の眞生活の門戸が開かれる。精神生活の扉は、與へられることを待つやうな怠惰なも

の、前には永遠に開かれない。凡てを内に求め、凡てを自己に求むるものにして始めて眞の安立も眞の幸福も獲られる。この意味に於て、本當に生活の安立を獲ようとする教育者は、ソロモンの榮華よりも野の百合花により多くの價值を見出すやうでなくてはならない。爵位勳等よりも無心の幼子の捧げる愛の感謝を選ぶやうでなくてはならない。形式的に與へられる百金の賞與よりも淳朴な村人の送る菜蔬により多くの喜びを感ずるやうでなくてはならない。自己衷奥の信念を恃みとすることによつて富貴にも威武にも屈しないものでなくてはならない。殊に殊に何よりも「愛」に生きようとするものでなくてはならない。

(五)

愛は人性乃至人生の中で最も美しいそして最も微妙な作用である。愛



なき人の生活程寂寥なそして索漠なものはない。他に對して、功利打算の交渉でなければ單に皮相な交渉しかすることの出来ないのが愛のない人の生活である。愛は實に温い精神的抱擁である。何ものをもその最善のすがたに於て見ようとする肯定の心である。何ものをも温い感情のいぶきに包まうとする慈育の心である。この意味に於て愛は情味生活の原動力である。生活にうるほひとゆとりと温みと深みと光と生氣とを與ふるものが愛である。愛に生きる人の生活は内に充實し内に充ち足りる生活である。他から求めるよりも他に與へようとする生活である。献身に生き犠牲に生き聽順に生きようとする生活である。愛に生きる人の生活は一切を友とし一切と融け合ひ一切と共鳴しようとする生活である。

さて教育者にして、愛の目を以て教へ子に向ひ、愛の心を以て教へ子に對する時は、第一に強烈な責任感を感じなくてはならない。幾十の教

へ子が、その全運命を自分の手に托して居ることを自覺する時には、貧弱な自分の能力を恥ぢ、低劣な自分の人格を恐れなくてはならない。一人が一人を育てることすら洵に重大な事件である。然るに、只一人が而かも弱小な人間が、生涯中には何百何千何萬の教へ子を育て、行かねばならぬことが恐ろしいことでなくて何であらうか。そして若しもまたこの多數の人達を眞に愛し得るならば世にこれ程偉大なことがあるであらうか。否、教育者にして若しもこの愛の中に、教育者としての自己存在の意義と價值とを以て安立境とを見出すことが出来なかつたならば、果して何處に見出すことが出来るであらうか。

教育者にして愛に生きようと思へすれば、生活の幸福は永しへに盡きない。一人を完全に愛し得ることさへ人生無上の幸福であるのに、教育者の愛の對象は無限だからである。これに反して愛を輕視する教育者の



生活程案漠なそして寂寥なものはない。其處には只智識の切賣と、權威の強請と形式の囚はれと、機械的活動と、物的不満とがあるばかりである。

教育者といふものゝ、獨自な意義と價值とが精神的事業であることにあらんとしたならば、いふ所の精神事業の特色は愛を以て生命とする所にある。随つて教育者として眞に生きんとするには、愛に生きる他はない。愛によつて生活の價值を見出し幸福を見出す他はない。随つて愛なき教育者は永久に生活の安立境を見出すことは出來まい。然るに世には愛なき教育者がまことに多いではないか。

彼等は教へ子を只生活の方便と見る。随つて彼等は只教へ子の目前の利益と幸福とさへはかればよい。否彼等は只自分の形式的義務さへ果せばよいのである。假なく血なくして徒らにパンに餓えた廢殘の枯稿を以

て刻一刻と伸び行く若い生命に對すること程恐ろしい罪深いことはない。それはまことに幼子の生血をすゝつて命を保つと同様だからである。

「パンのため」と愛なき人はいふ。けれども、愛の花は金殿玉樓には咲かなくて寧ろ却つて浮世の榮華の光の當らぬ日蔭の地に咲くものである。私はこの日蔭に咲く愛の花に口づけしながら寂しい歌を歌つて一生を過されば足りる。吹けば飛ぶやうなあだなる幸福の光にたぶらかされて浮華輕佻の生涯を送ることは私の堪へ得る所ではない。私は物的にはたとひどれ程貧弱な生活にしてもよいから、只美しい愛に生きたいと思ふ。何等の疚しい所もなく何等の恐れる所もなく何等の嬌る所もなく、平和なそして愛情に充ちあふれた、はれがましい喜ばしい心で、たとへばベスタロッチのやうに一切の名譽も一切の苦痛も忘れ、ひたすらに愛に酔うて我が教へ子の面前に立つことが出来るやうになりさへすればよ



い。僅に四ヶ年位の修養を誇り顔にして大言壯語するには、我が心は餘りに明らかに目覺め、我が心は餘りに敬虔に遜つて居る。

吁小さき我が希望よ、吁小さき我が信念よ。嗤ふ人は嗤へ、嘲る人は嘲れ。我は世の識者に友を求めようとはしない。世の誇れる人に知己を求めようとはしない。我は只永しへに天真な我が教へ子より友と呼び師と呼はるれば足りる。我はこの小さき併しながら尊き希望と信念とを懷いて教育界の人となるのである。我が前途は光か闇か。凡庸我等が如きものゝあづかり知る所ではない。我は只自己の全力を盡してひたすらに我が是正と信ずる道を慕進すればよい。沈黙しながらそして微笑みながら、永久へに。

## 四 生か死か

竹島はこれを読み終るとさもガツカリしたやうに深い／＼溜息をついた。そして彼は恰かも七年前の當時を回想するやうな様子で靜かに蒼白い顔を擧げて見るともなしに座敷の一隅を見上げた。彼の力なき目は、そこに掲げられた一葉の寫眞を認めて少からず驚駭した。それは彼が師範學校卒業紀念の寫眞であつた。彼はいかにも恐ろしいものでありながら而かも強い誘惑を感じずるものゝやうな様子で立ち上り、そしてほこりだらけの寫眞を取り外した。そして表をハンケチで拭いてから裏を返して又拭いた。其處には教職員を始め同窓生三十餘名の姓名が書きつけられて居た。彼は直ぐ表を返した。そして今更のやうに懷舊の情に打たれたかのやうに深い溜息をついた。――



明治四十〇年三月二十〇日。あゝこの日こそ彼が四年間住み慣れた學校を捨て、社會に出ようとする前日ではないか。

三十餘の同窓生は皆卒業の歡喜に酔うて居た。互に好きな友人を選んで將來のことなどを如何にも楽しさうに語り合つて居た。而かも竹島の胸奥は一團の暗雲に閉されて居た。彼は自己に目覺めてから一年餘の間、孜孜として自分の信ずる道を歩いて來た。けれども豫期的一端も充たされなかつた。彼は自分の力の弱さを今更のやうに痛歎した。彼は自分の實力の餘りに貧弱なことを今更のやうに悲しんだ。然るに自分の同窓生は何を信じ何を頼んで斯くも楽しさうに、斯くも喜ばしさうにして居るのであらうか。彼は其處に無知の幸福を見出した。無自覺の安心を見出した。併し、其のことは彼にとつて最も悲しい最も寂しいことであつた。彼は實力の足りない自分を悲しんだが而かも實力が足りないことを自覺

して居るだけ未だ自分は無自覺な彼等に優つて居ると思つた。

「四ヶ年間只夢のやうに暮して居ながら、タツタ一枚の免許狀や卒業證書を貰つただけで如何にも鬼の首でも取つたかのやうな思ひ上つた態度で學校を出て行く彼等に何の幸福があらう。彼等は高尚なことを口にしなから、一步校門を出さへすれば、直ぐに俗惡な教育界の空氣に感染し怠惰になり、臆病になり、卑屈になり、狡猾になつて、姑息偷安のアキラメ屋になるか、さうでなければ教育界や社會を呪ふ不平家になるか二つ一つである。他人は止むを得ない。少くとも私だけはこの惡風に染ひまい。實力は勿論未だ貧弱だ。けれども私には教育者としての自覺がある、信念がある、熱情がある。私は物質上の快樂や幸福を獲るために教育者とならうとしたのではない。社會上の地位や名聲やを獲るために教育者とならうとしたのではない。私は只一個の小學教師として誇る



に足るやうな人間になりさへすればよいのだ。王侯貴人の前にも出て、顯官富豪の前にも出て、『私は小學教師である』と高らかに名乗つて羞恥も不安も矛盾も感じないやうな充實した自己を持つた小學教師になりさへすればよいのだ。物的幸福や其の他の低級なものを本當に一笑に附することの出来るやうな深い精神生活に生の價値と安立境とを見出せばよいのだ。かういふ覺悟を持つて居るだけでも、私は無自覺なそれで居て高慢らしい、そして又幸福らしい顔をして居る彼等よりも數等優つて居るのだ。……」

彼はかう思ふと尙更彼等のうはついた言語や態度が不愉快に感じられてならなかつた。で彼はとうとう、たまり兼ねて一人の友人を擡へてかういつた。――

「君達は何がそんなに嬉しいんだ。四年間遊び通して二十冊や三十冊の教科書を上つかすりに覺えただけで、何一つしつかりした自分自身のものも持たないくせに、おなさに免許狀一枚の身上をたよりにしてせち辛い社會に出るのが何でそんなに嬉しいんだ。」

其の夜は寄宿舎の食堂で在校生全體の送別會があつた。校長を始め教職員全體列席の上で、いつものやうに月並な通一遍の訓辭やら送辭やら感想やらがあつた。やがて卒業生が答辭を述べなくてはならない場合となつた。所がその前日答辭を述べる人を選び時に卒業生の派が二つに別れた。一つは特待生の鹽田を推すものと一つは竹島を推すものであつた。竹島は極力自分が其の任でないことゝ、若しも自分が壇に立つならば、自分一個の意見を正直に大膽にいはなくてはならないし、さうすれば先生方は勿論諸君の感情をも害するやうなことになるかもしれないから御免を蒙るといつて幾度もくく辭退したけれども、竹島黨の人達が肯



かなかつたので投票で決することになつた。開票の結果三四人の次點者があつた外は竹島と鹽田とが同點であつたので問題はまた複雑になつて、も一度決選投票をすることになつた。すると小山が突然起つて、「鹽田が正式に答辭を述べた後で、竹島が自由な演説をすると云ふことにした方が一番よいではないか」といふ提議をした。そしてそれが衆人の容れる所となつて鹽田と竹島とは異つた意味で卒業生を代表することゝなつた。かうして愈々卒業生の答辭となつた。温厚篤實な鹽田の答辭については何人も異常な期待をするものがなかつた。事實に於て鹽田は至つて謹嚴な態度で多年に亘る師友の恩誼を謝し、教育者としての自分の覺悟を述べ、最後に師友の祥福を祈つて靜かに降壇した。けれども、竹島に對しては先生も生徒も卒業生も凡て皆異様な期待を懷いて居たので、彼が座を起つと拍子が急激のやうに鳴つた。壇上に表はれた彼の蒼白い顔は

何時になくほんのりと紅潮して居た。併し、聲調は何時もの如く低く靜かであつた。

「凡そ世の中に、他人の、殊に澤山の他人の意志を代表するといふこと程潜越なことがないと私は思ひます。否、それは全然不可能なことだと思ひます。何となれば、意志表現の形式、即ち言語文章行動等の外形は同様に見えても、實際の所は各人皆異つて居るものだからであります。たとへば、今晚このやうに送別會をして戴くにしましても、それに對して「嬉しい」と感ずることは凡ての卒業生が皆同一であります。その「嬉しい」といふ感じの内容、即ち嬉しい理由と嬉しさの程度とが各人皆異つて居るといふやうな譯だからであります。ですから私にはたとへば鹽田君のやうに、三十幾人の卒業生全體を代表して答辭を述べるとか感想を述べるとかいふことは到底出來ないことであります。隨



つて、私の感想は文字通りに私一個の感想でありますから、たとひどんな極端なことを申しましても其のために私の知友に累を及ぼさないやうにしていたさきたい。尙序に豫め御願して置きたいことは、一度私の登壇を許して下さつた以上は私の發言の自由を許していただきたいといふことでもあります。即ち國法に觸れない限りは私の談話を終まで聞いていたさきたいといふことでもあります。私は明日からはもう免許状所有者として即ち社會の一員として世に出なくてはなりません。即ち私が學生としての演説は今夜限りでありますから、どうぞこの一書生の人格と思想の自由とを尊重していただきたいのであります。」かういつて彼は靜かに職員席から生徒の席まで一わたり眺め直したけれども誰一人「ノー」といふものがなかつた。と、卒業生の席から大きな聲で「大にやるべー！」と叫んだものがあつた。それは小山であつた。それ

を聞いた竹島は寂しく微笑をたゞえて、復た正面を見た。場内の空氣が何となく緊張して來たやうに感じられた。けれども彼は依然として靜かな聲で語つた。

「異議を唱へて下さる方がないやうでありますから、私は私の良心と時間許す限り、私の思ふ所を最も正直に披瀝しようと思ひます。」

かういつて彼は心持職員席の方からだを向けた。聴衆の目は一齊にその方に注がれた。

「校長先生始め諸先生！」聲は沈痛であつた。

「私は茲でかたの如く衷心から諸先生の御厚恩を感謝して居るやうな態度に出れば至極平和であります。悲しい哉私には其れが出来ません。勿論私は、四ヶ年の間教へて戴いたこと其のことに就いては人並の感謝はして居ります。併しそれは先生方の職務上即ち師範學校教師とい



ふ職業に依つて生活せられるための當然の責務を果されたのでありますから、その點についてはこれまであり來りの師弟關係以上に特別な感謝を拂ふ必要がないことと思ひます。否、私の衷心の要求から申しますと、洵に失禮な申分であります。私は先生方の態度なり或は教育の内容なりに就いて甚だしい不満を感じ、随つて感謝どころか寧ろ怨恨を感じて居る程であります。即ち、先生方さへ今一層の誠意と實力とを持つてお出でになるならば、必ず私達をもつと立派な人間にして下さつたことだらうと思ひます。如何にも私は入學以來四ヶ年の間に種々様々な知識技能を授けて戴きました。けれども、只の一度でも自分の教育者としての信念又は覺悟を定める上に役立つやうな力強い教訓を受けたことがありません。勿論教育者といふものゝ天職とか價値とかいふものについて、抽象的な説明を聞かされたことは澤山あり

ますが、只の一度でも教育者の天職に對する心の底からの讚美の聲を聞いたことがありません。否、先生方は口では小學校教師はよいと仰りながら心の中では實際輕蔑して居られるのは、少しでも成績のよい生徒に對しては必ず高等師範に入ることをお奨めになることや、先生方の半分が検定出の方即ち小學校教師よりも中等教師がよいと思つて中途でお捨てになつた方であるに徴しても極めて明白なことだと思ひます。そればかりではなく、學校の方針は出来るだけ私どもを型に箝め込み、私共を盲目なものにしようとする。即ち出来るだけ私どもに本當のことを考へさせまい、本當の自分を見さすまいとする。少し眞面目なものである限り、青年時代には随分いろ／＼の疑問が起ります。勿論其の中には極下らない、または有害なものもありませう。けれども、其の大半は、當人にとっては實に重大な意味を持つて居るもので



あります。然るに、さういふ緊要な切實な問題について煩悶して居たり、またはさういふ問題の解決を見出すための讀書をしたりすると、直ぐにやれ危険思想だとか何だとかいつて冷笑したり高壓したりするといふ有様であります。若し、そんな問題を提げて先生方に質問でもしようものなら、それについて解答を與へては下さらずに、却つて「君は宿題が出来たか」とか、「君の前學期の化學の成績が、前より何點何分悪かつたからこんどはしつかり勉強したらよいぢアないか」とかいつてその問題とは直接關係のない小言を仰しやるだけではありませんか。若し幸に教へて下さる先生があるとすれば、それは大抵は實際の具體的な事實を精査しないで、只「凡そ人生の目的は」とか、「倫理學上の自我實現説は」といふ抽象的な説明をして呉れるに過ぎないのであります。そして少しでも學科の成績が悪ければ呼びつけて懇々と教訓をな

さいます。これは如何にも親切なやうではありますが、實は本當に生徒のために成績を心配して下さるのではなくて、先生方御自身のために、即ち、所謂先生方の「成績」を上げになるために心配して下さるのでありますから有難味が甚だ少くなる譯であります。若しこれに反して、本當に私たちのために思つて下さるのであるならば、個人個人の本當の煩悶や懊惱について、懇切な解決なり指導なりをして下さるべき筈ではありませんか。少くとも、個人個人の長所だけでも十分理解して其れを助長するやうな指導や激勵やを與へて下さるべき筈ではありませんか。然るに、各科の先生方は皆な自分の専門の科目のみを標準として生徒に接するため、生徒の全體の「人」としての價值又は長短といふことに就いては何等の注意をも拂はないで、只偏に小さな専門家にしようとなさるのであります。そして其の専門家といふことも、



生徒の本當に優れた能力を根本から涵養し助長して行くといふならまだよいのでありますが、實はさうではなくて、大抵は單に御自分の好みに従つて教科書の復習を餘計にさせるといつたやうな皮相的な方法を講ずるに過ぎないのであります。

勿論これらは、生徒さへしつかりして居るならたしかに害にはならないのでありますが、師範學校に入るやうな生徒は大抵意氣地がない。入學願書を出した時からもう職人根性で固り切つて居る。えらい人間になるよりも先づ食ひはぐれの無い人間になる。人格的に優れたものなるよりも俸給を餘計貰ふ人間になる。凡てが功利的であり打算的であります。かうして、一番正直に大膽に率直に天真に誠實に純真にすべき筈の大事な青年時代を職業の犠牲にしてしまふのであります。そして、その事を當人がうらみにしないのは勿論、先生方もさういふ

考で教科書を勉強したり、出席をはげんだり、表面上従順で温厚で誠實で品行方正でありさへすれば、これを模範の生徒として稱揚するといふやうな有様でありますから、本當に價値のある教育者にならうとするもの、本當に自分に恥かしくないやうな生き方をしようとするもの、自由に思索し正直に振舞はうとするものは、常に少からぬ迫害を受けなくてはなりません。随つてまたかういふ人達は、多くは自暴自棄の徒となるか、さうでなければ不平不満の徒となつて了ふのであります。然るに先生方はこれを以て凡て當人の罪又は社會思潮の罪として御自分達には何等の關係もないものゝやうに御考へになる。これが果して正しいことでありませうか。私は茲にも甚だしい疑惑と不満とをいだくものであります。

私から見まするに、眞面目な生活をする上に何よりも大切なことは、



自分の最深要求又は眞要求が何であるかを理解するといふことであります。何故なれば、自分の最深要求に従つて生活してのみ自我が統一的に活動し、自我が根柢から活動するからであります。實に私は、道德の道德たる所以、道德的生活の道德的生活たる所以は、自己の最深要求によつて自我を統一的に活動せしめる所にあること、思ひます。即ち、自律的に生きる所にあること、思ひます。私は自由を望みます。けれども、私の望む所の自由は勿論自墮落放肆の自由ではありません。即ちこの意味の自律であります。自分の最も望ましい所、自分の是正と信ずる所を執つて挺子でも動かないといふ大勇猛心を根柢とする自由であります。「自由リベリティーか然らずオア、デスば死か」といふ生死を暗した磐石の自尊心の上に立つ自由であります。孔子の所謂「心の欲する所に従つて規を踰えざる」底の自由であります。私はこの自由この自律を主眼として生き

ようとする人、又は生きることの出来る人のみ本當の人格者だと思ひます。そしてまたこの種の人格者のみ本當の教育者になることが出来るのだと思ひます。然るに我が師範學校は私達をこの人格者とするためにどれだけの力を注いで居られるでありませうか。規律を正しくせよ。命令を遵法せよ。従順にせよ。教科書以外の本や雑誌を勝手に讀んではならぬ。……こんな具合に萬事に亘り、生徒をして偏に消極的な態度を取らせるやうに、即ち盲従でなければ模倣に出でしめようとする所にどうして本當の我が目覺め、本當の人格が生れて來るでありませうか。私は表面上美しい徳目の名にたぶらかされて、多くの若い人達の尊い自我が虐げられ、多くの若い人達の純な生命が蝕まれるのを見るには堪へないのであります。淺薄な知識と拙劣な技能と、即ち世渡りの道を購ふために四ヶ年間の日子を費してわざ／＼自己の純眞



性を、若い生命を傷けることに努力することを見るのは到底私の堪へ得ない所であります。否、このことをも知らずに、パンを獲る喜びに自己の生命を忘れて居る人達を目のあたり見ることは私の何よりも悲しみとする所であります。然るに低級な社會と無邪氣な少年少女とは、この自我なく人格のない人達を「新卒業生」の名の下に不當な歡待をするのではありませんか。そしてまたこの人達は、この不當の歡待を以て恰かも正當な歡待であるかのやうに誤信し得々としてその貧弱な自己を振廻さうとするのではありませんか。斯くしてこの人達は益々自己を損ふばかりでなく、無邪氣な教へ子を傷つけ社會を毒するのではありませんか。そしてこれが教育といふ美しくい名に依つて白日の下に堂々と行はれるのでありませんか。若しもこれをしも憂ひとしないならば、私達は抑も何を憂ひとすればよいのでありませんか。

勿論私は私一個の感想を述べるのでありますから、恐らく偏見もあり誤斷もあるのであります。只私の信念の中で如何なる反對に遇つても動かないものは、私は本當に教育者らしい教育者になりたいといふことを衷心希望して居るものでありますし、随つてまた私は教育にたづさはつて居る人及びこれから教育にたづさはらうとする人に對しても、凡てこの要求を基本として觀察もし批判もするものであるといふことであります。即ち、凡ての教育關係者が本當の教育者になつて欲しいと望むものであるといふことであります。そしてこの要求が私にとつて矛盾を感じないかぎり、私は何時までも師範教育の弊害を詛ふと共に、師範學生の無自覺を難するものであります。

斯やうに申しましたならば、恐らく私は忘恩の大罪を以て責められるであります。恐らくこれまでよりも一層激烈に危険視され異端視



されるであります。けれども、私は聊かもそれを恐れません。何故なれば、私は、私が斯やうに自覺するに至つたことに就いては、直接間接に先生方の影響が多いことを衷心感謝して居るものでありますし、又たとひどんな非難がありましたも私は危険な思想を懐いて居るものでも教育界の異端でもないと確く信じて居るからであります。否、甚だ潜越ではありますが、私こそ實に自己に對して最も忠實であると共に、教育界に對しても亦最も忠實なものであると確く信じて居るからであります。私は、勿論未だ下らない一貧書生であります。けれども、本當の教育者たらんとする私の誠意と熱情とは、恐らく王侯と雖も奪ふことが出来ずまい。私は只この誠意と熱情とを持つて居るものとしての自分を敬愛します。そして私はこの敬愛の心を唯一の武器として、腐敗し沈滞した現今の教育界に戦を宣し、永遠に力戦苦闘の生活を

をつゞけて行かうと思ひます。或は、中途にして私の力が盡きて、空しく傷ついた屍を戦場に曝すに至るかも知れませんが、私は私の最深要求に殉し、私の最善の道の上に倒れることは、寧ろ本望とする所であります。ですから、將來若しも私が、今日のこの覺悟をゆゑ、顯業の地位を望み低級な快樂や幸福を希ふやうなことがありましたならば、其時こそ、竹島秀一が精神的にのたれ死にをした時と思つて下さい。そしてあらん限りの冷笑嘲罵をあびせて下さい。あらん限りの侮蔑凌辱を加へて下さい。私のこの目をえぐり、私のこの口を割き、私のこの心臓を貫いて、野犬や山鳥の餌食として下さい。……」

竹島の興奮は極度に達して右の拳を固めて心臓の上に強く押し當てた儘暫らく沈黙して居た。口のあたりが恰かも痙攣を感ずるかのやうにビク／＼と動いて居た。……



彼は追想の糸を辿つて、絃まで到り就いたと思ふ刹那に、恰かも、ブツ、と糸が切れたやうに感じた。と恰も全身に冷水を浴せかけられたやうな悪感を感じた。彼は發作的に前にあつた寫眞を取り上げた。そして又電のやうにそれを疊の上に擲り出して、机の上に兩肘を突き、兩掌を額の上に押し宛て、目を瞑つた。そして深い、溜息をついた。

沈黙は沈黙を生んで、死の様な寂しさは八疊の室一ばいに充ち亘つた。夜は將に深更らしく、四邊は聞として聲がない。ひとり枕時計の音のみ、力強く而かも何ものかを求めつゝ、刻々に人の肺腑に薄るかのやうにセコンドを刻んで居る。やがて竹島の兩手が額をすべらしたかと思ふと、狂人のやうにいきなり十本の指で髪の毛をむしつた。それも束の間、彼は死人のやうにパタリと机の上になつた。そして恰も冥府からの使の聲のやうに寂しく力なく、而かも氣味わるく叫んだ。

「俺は、今この目を剝り、この口を割き、この心臓を割いて野犬や山鳥の餌食にならなくてはならないやうな境遇にあるんだ！」

かういひ了ると彼は弾ね返されたやうに机から上身を起して何處ともなく白眼んだ。やがて仰向にばかりと倒れて、兩手を枕にしたまゝ身じろぎもしなかつた。と、遠くの方で、絹を割くやうな夜行の汽笛と、うめくが如き鈍重な車の響きとが凶兆のやうに彼の傷さおびえた心臓をつき破つた。



## 五 黎 明

暫らくして起き上つた竹島の眼は涙にたゞれて居た。彼は穴あらば入りたい程にも深く羞恥を感じた。——七年前、豫言者のやうに高潔なそして熱烈な理想と覺悟とで學校を出た自分が今日の有様はどうであらう。今日までの有様はどうであらう。昨日今日の私の心は果して何を望み、私の目は果して何に憧れて居るであらうか。私に何の信ずる所がある。私に何の恃む所がある。私に何の誇る所がある。私に何の安んずる所がある。私の心は餓虎の如くさもしく、荒野の如くすすんで居るではないか。如何にも、私は儕輩から見ればかなり羨むべき境遇に居るのかも知れない。學校を出て僅かに滿六年で既に縣下第一流の學校の首席となり、更に新設の學校の校長になる日が近づいて居るではないか。私の書

くものも、相當に人の注意を惹き、私の言論も相當に重きを成して居る。師範學校の訓導さへ私には常に一目を置いて居る。老校長連も常に私を畏れて居る。けれども其れが何だ。本當の教育者として其れがどれ程の値打がある。七年前の私は勿論今日とは比較にならない程地位も低く學識も貧弱であつた。けれどもあの當時は、たとひどんな偉人の前に立つてもたとひどんな聖賢の前に立つても、羞恥や疚しさを感じることはないと思はれる程、心が高潔であり純眞であり緊張して居た。ベスタロッチも私の友として何等恐るべき所がなかつた。然るに今はどうだ。今の私はどうだ。學識も進み技能も熟達し地位も高まつては居ながら、何處にあの當時のやうな尊い生一本な面影がある。言行の凡てが功利打算から來て居るではないか。凡てが方便手段から來て居るではないか。凡てが上つかすりではないか。凡てが間に合せではないか。



如何にも外面から見たならば、私は教育のために非常に熱心に努力して居るやうに思はれるであらう。實際私は、教育上の「仕事」にはひと一倍精出して居る。けれども教育上の「仕事」に精出すことは決して「教育其のもの」に對して熱心になることではない。私は、私自身が教育上の仕事に精出して居る本當の動機を考へて見ると、只もう怖ろしい心地がするだけである。私は本當に國家のためにも思つて居なければ、本當に學校の子供たちのためにも思つて居なければ、また本當に學校のためにも思つて居ない。即ち、私は本當に「教育そのもの」のために熱心に努力して居るのではない。私は、只私自身のために努力して居るだけだ。否、私は本當に私自身のためにさへ努力して居るのではなくて、只私の低級な利益や幸福のためにのみ努力して居るに過ぎない。私は、子供たちの本當の幸福を希ふために教授や訓練に熱心になるのではなくて、私の名を擧げたいために熱

心になつて居るのだ。校長をたすけて首席としての任務を果すために力を注いで居るのは、本當に校長を尊敬して居るためでもなければ、またさうすることによつてこの學校の教育の進歩をはからうとするためでもなくて、只自分の信用を増し出世の基礎を固めるために過ぎないのだ。首席としてのこの地位をうまくやつてさへ行けば、あとは一流の學校の校長になれるといふ興味や目的が中心になつてやるだけのことだ。只そのためにのみ私は精勵をもし、其ののためにのみ日曜さへも學校に顔を出す。私が職員會などで常に公平な態度を取つて居るのは、自分の性格が中正を好み、温厚篤實だからではなくて、只上からも下からも憎まれることを恐れて居るがためではないか。私が教育雑誌や各種の會合などで自分の意見を發表するのも、教育のためを考へるからではなく、寧ろ自分の名譽を揚げたいからではないか。私が教育者の生活や教育界に就い



て不満不平をいふのは、決して、教育者そのものの、教育そのものゝためではなくて、皆さもしい自分の利害打算から來た不満不平ではないか。児童の家庭を訪問するにしても本當に其の児童を愛して居るがためではなくて、つとめだから仕方なしにするのではないか。富んだ子の家庭に行くのを喜んで貧しい子の家庭に行くのを嫌ふのは、果して何のためであるか。劣等生の補充をするのも其等の劣等児がかあいさうだと思つてすることではなくて、只自分の受持の成績を擧げたいためばかりではないか。児童の出席をやかましく督促するのもやはりこれと同様に自分の成績を擧げたいためばかりではないか。參觀人がある時とない時とで教授に費す努力誠意に相違のあるのは果して何のためか。私は時々自分の教へ子に對して、私はみんな同じに皆さんを愛して居るといふが、果してどれ程平等に愛して居るのか。私は成績考査簿を見て疚しさを感ぜない

ことが果してあるであらうか。證書授與式に臨んで心の戦慄を覺えないことが果してあるであらうか。「愛」を標榜しながら私はこの七年の間に只の一人でも「本當に愛した」といひ得るものが果してあるであらうか。

このやうに淺薄な、このやうに虚偽と矛盾と缺陷とに充ちた生活をして居ながら、私はこれまで毎日何を喜んで笑ひ何を樂んで歌つて居たのであらうか。地位が高いとは何だ。待遇がよいとは何だ。評判がよいとは何だ。昇進が早いとは何だ。望みがあるとは何だ。こんな少々な市の一流學校の首席訓導の地位が何で高からう。一ヶ月僅々三十金の待遇が何でよからう。中等教育を卒へたものばかりの社會から得た評判に何の價があらう。六年間に僅か十圓前後の昇給をしたとてそれがどれ程のほこりにならう。「人格の價値」と「手腕の價値」との區別を知らない人達から得た人望に何の値があらう。私はまだ世間を知らなかつたのだ。未だ活社



會を知らなかつたのだ。否、未だ自分自身を知らなかつたのだ。私はこれまで團栗の背比べをしたり、五十歩百歩を争つたりして、それで人並の生存競争をしたり、人並の奮闘をしたり、人並の苦勞をしたりしたつもりで居た。二年目や三年目や或は五年目で二三圓の昇給をして喜んだり、出席歩合が他の級より一二點少いとて溜息をついたりするやうな、小心な子供染みだけ臭い世界での昇進が他の活社會の昇進に比べて見たらどうであらう。一生かゝつて月給百圓に勤八等に奏任待遇！こんな世界でどれ程奮闘したとて何の光榮があらう。對手は西も東も判らぬ子供！同僚は市學務委員の子供の御機嫌をさへ取つて居るやうな意氣地なし！そんな世界でそんな人達と競争して勝利を得たとて何になる。殊に、それが阿諛叩頭さもししい術數をさへ用ゐて購ひ得た勝利であるとは何ごとだ！ 吁ままごとのやうな生活！ 波の荒い活世界の只中で、

日夜に生死を睹して奮闘して居る人達から見たなら、私達の生活はどんなに下らない、張合のない、ふやけた生活に見えるであらう。教育者といふものは口には随分高尚なことをいつて居る。やれ精神的事業だの、やれ犠牲的生活だの、やれ神聖な職業だの、やれ何だのと……けれども何處に精神生活の白熱がある。何處に火の出るやうな精神的努力がある。十年一日のやうに、型に倣り惰性に泥んだ生活に何の緊張があり何の充實がある。理想もなく信念もない處にどうして深い精神生活があらはれよう。小さな會社の事務員を羨んだり、下級軍人を羨んだりするやうな人達の生活に、四六時中穢はしい暗闘や權謀術策やの斷え間もないやうな人達の生活に、何の神聖があり何の尊嚴があらう。一寸した不平や僅かばかりの待遇のために、數年間棲み慣れた土地や學校と數年間慈しみ育んだ教へ子とを弊履の如く捨て去つて何とも思はぬやうな人達の生活



が何で犠牲的生活であらう。

ああこのやうな人達の間に入り、このやうな世界の中にあつて、私はこれまで何を望み何を求めて居たであらうか。何を恃み何を誇り何を楽しんで居たであらうか。私は私の望み私の求めて居るものゝ何であるか、そしてそれがどれ程値打のあるものであるかを嚴密に反省し精確に理解することなしに、徒らに望み且求めて居た。私は私の恃み私の誇り私の楽しみとして居るものゝ何であるか、そしてそれがどれ程値打のあるものであるかを嚴密に反省し精確に理解することなしに徒らに恃み誇り、且楽しみとして居た。私のこれ迄の生活に自分をも人をも根柢から動かす力と光とがなかつたのもこれがためであつた。私は何よりも先にこの點をこの一點だけをどん底まで見つめ掘り極めなくてはならないのであつた。私はその大事な出發點を置き去りにして只前へ／＼と進まうとし

た。そこに私の生活の虚偽があり、矛盾があり、弱點があり、そして破綻があつた。私は私としては望むべからざる求むべからざるものを望み且求めて居た。そしてそれは望むべからざるもの求むべからざるものである事を一通理解して居た。もう一步だけ深く考へさへすれば十分に理解し得るものを、私はその一步を進めようとしなかつた。それは何故であらうか。それは、私が安きを求めたからである。私に誠意と勇氣とが缺けて居たからである。私の心が墮落して居たからである。眞實を見るよりも虚偽を見ることの安きを知つて居たからである。自己の最深要求に忠實であるよりも、目前の低級な要求に従ふことが容易いことを知つて居たからである。低劣な自己に鞭打つて精進の道を辿るよりも、低劣な自己を甘やかして偷安の夢に耽つて居る方が安樂であることを知つて居たからである。一言にすれば、本當に自己を愛して居なかつたから



である。吁と何といふ墮落の仕方であらう。吁何いふ淺ましい醜惡な様であらう。嘗ては、七年前には、この弊害を極力諷つた私ではないか。生命を賭してこの弊風と戦ふことを宣言して學校を出た私ではないか。この弊風に染まるなら死を以て謝することを誓つて熱涙を流した私ではないか。その私がこの姿とは何だ！この心とは何だ！私は何を以てあの當時罵倒に罵倒を加へた先生方に見えることが出来ようか。私は何を以てあの當時私に心からの讃辭と激勵とを與へて呉れた人達に見えることが出来ようか。當人の私自身さへ、このやうに良心が麻痺して居る程であるから、勿論あの當時の師友は單に遠い過去の一つの毛色の變つた挿話としてあの當時の私の言行を臆げに記憶して居るに止るであらう。たとひどれ程明白に記憶して居るにしても、私の七年間の變化を私一人だけの變化として賣節の罪食言の罪を責めるよりも、寧ろ人生の到る所

に數多く現はれる日常茶飯事として齒牙にもかけぬであらう。けれども私はそれで満足してよいのであらうか。私は只他の毀譽褒貶のみに左右されて生きて居てよいであらうか。私は何よりも私自身の良心の叫びに傾聴しなくてはならないではないか。さうだ。私の今恐れて居る所は他人のよい加減な非難や冷笑ではない。私の今苦悶とする所は、私自身に對して顔向がならないことなのだ。私が私自身のうちからの非難冷笑を恐れて居るのだ。自分の罪を自覺しない中はそれで済む。けれども苟くも一旦過去の自己が蘇つて來た限り、本當の自己が目覺めて來た限り、たとひ世界全體の人が私の弱點をあはれみ私の罪惡を宥して呉れるにしても、私はそれで安心する譯には行かない。私は私自身のために私自身を責めなくてはならない。私は私自身のために私自身を憎まなくてはならない。そして私は私自身のために私自身を大切にしなければならぬ。



私は全人類をあざむくことが出来る。けれども私は私自身をあざむき了せることが出来ない。私は全人類の非難憎悪よりも、私自身の非難憎悪が苦しい。私は勿論今は眇たる一小學教師に過ぎない。否永久に眇たる一小學教師で了るであらう。そして大きな世界は、數多い人類は、複雑な人生は、忙しい社會は、冷淡な他人は、この眇たる田舎教師の内生活の苦悶などは聊かも關り知らぬであらう。けれども、苟くも眞實に生きようとする熱烈な意志が炬火のやうに目覺めて居る限り、身分や地位は何等の妨げともならない。私自身にとつては、眇たる私の運命は世界の興亡よりも重大な問題である。私が今生活の岐路に起つて、右するか左するかを定めることは、地球と惑星とが衝突するかしないかを明らかにするよりも切實な問題である。私は人間としての私は、たとひ眇たる一小學教師であらうとも、私自身にとつては世界の如何なる偉人よりも敬

愛しなくてはならない。さうだ。今こそ私は七ヶ年の悪夢から醒されて死生の追分に起たされたのだ。今こそ大きな試みの時に遇つたのだ。今こそ「エントウエーダーオーダー」に面接したのだ。時が來た。吁遂に時が來たのだ！……

竹島は如何にも目に見えない何ものかを恐れるやうにブルブルと身ぶるひした。そして瞑黙した。鳴きすだいた虫の聲も疲れたらしく世は一段の静けさを加へた。竹島は眼を開くと障子に映つた大きな自分の影法師を見て慄然とした。彼にはその影が本當の自分のやうに思はれた。彼は其影を消さうとしてからだを左右上下に動して見たが只形が動くだけでどうしても消えようとはしない。秒數秒、彼の心は次第に焦立つて來た。どうしてもその影を無くしなくては心が安んじないやうな激しい強迫を感じた。彼は發作的に腕を伸べて電燈をねぢつた。室は一面の闇と



化した。彼は自分の影の消えた闇の中に本当の自分を攫まうといふやうな心持でジツと闇を見詰めた。けれども其處にあるものは只闇だけで本当の自分も偽の自分も見えなかつた。彼の望んだのは無ではない。暗黒ではない。影のない正味のみの自分であつた。彼の目は強く闇を凝視めたために疲勞を感じて自から瞑つてしまつた。彼は其の目を瞑つた刹那に、何となく本当の自分らしいものに觸れたやうな氣分を感じた。そして彼は七年前師範學校を卒業する際に偶然にも激語したことが今更のやうに意味深く感じられた。「私は自分のこのけがれた目をえぐり取らなくてはならない。けがれたこの口を割かなくてはならない。けがれたこの心臓を貫かなくてはならない!」そして復び「内の世界」に永遠の生活を生きなくてはならない!」彼はかう低く、併しながら力強く獨語した。そして闇の中を手さぐりに、机の上の何ものかをさがし求めた。と、彼の

右手は一つのものを握つた。彼は其れを直ぐに左の心臓の上に當てた。と、心臓の鼓動が急に激しさを増して、その上に押し當てられたものを通じて手に傳はり、復び心臓に戻つて来るやうに感じられた。そして一鼓動毎にその激しさが加はつて行くやうに思はれた。

彼の手の力は鼓動の強まると共に刻一刻に強まつて行くやうに覺えた。これと共に、彼の目は闇の中に燃えるやうな「血の笑」をまざくと見た。次に彼はつめたく倒れて居る自己の亡骸を見た。次に彼は喧しい冷笑嘲罵の聲と悲しげな慟哭悲泣の聲とを聞いた。次に彼は其の慟哭悲泣するものゝ中に我が最愛の骨肉——妻、子、弟、父母の涙にくづをれたあはれな姿を通じて我が骨肉の美しい、そして熱烈な愛を見た。最後に彼は自分の亡骸をうらめしさうに見守つて居る憔悴した自己自身を見た。其の刹那に、彼はハツと自分に復へつて心臓の上に押し當て、居たジャ



ツクナイフをガラリと机の上に投げ出した。そして電燈を點じた。暗が太陽の光りに遇つた魔物のやうに周章て、四散した。彼は投げ捨てたナイフを凝然と見つめた。磨きすました刃の光は冷たい感じを彼の心臓に與へた。彼はそれを死の感じだと思つた。更に彼はそれを生の感じだとも思つた。と、一匹の絨織が何處からともなく飛んで来て冷たい刃の上に恐れげもなく止つた。そしてかすかに羽ばたきをした。羽ばたきの音は其の小虫の姿のやうな、其の羽のやうなやさしい寂しい歌の一節となつて彼の耳にひびいた。彼の心は清水に酔つたやうな清い、けれども冷たい興奮を覺えた。白刃の上の小虫の歌！彼は無限の感慨に打たれて身動きだもしなかつた。草叢の中で白露を吸ひながら死ぬ迄悲しげな歌を歌ひつゞける小虫の生活！其處に考ふべき深い暗示と教訓とがあるのだと彼は思つた。虫は彼の心を知つて居るかのやうに、三聲四聲鳴きつ

づけると、靜かに飛び立つて暗い屋外に姿をかくした。彼は恰かも虫の誘惑を感じたかのやうに立上つて再び庭に出た。

空にはもう月は無かつた。凝然として高く澄み亘つた蒼空を見上げて居ると、無数の星がひそかに「夜」を盗んで一つ／＼どこともなく無言に消えて行くやうにも思はれた。冷たい程に爽かな仲秋の朝風が、興奮した、併しながら疲れ切つた彼の心身に洗禮を與へるかのやうに感じられた。千歳山のあたりは仄かに白み初めた。鮮活な黎明の氣が天地一體に張り亘つた。疲勞に疲勞した彼の心身も急に生氣を覺えた。彼は兩手を高く差し上げると共に思ひ切つて兩足を爪上てた。そして胸も張り割けよとばかりに深く新鮮な空氣を吸つて、手足を下すと共に靜かに靜かに吹き出した。彼は快い眩暈を感じながら一度下した兩手に滿身の力を込め、かたく握り締めた。そして握つた儘の右の拳でかなり強く左の胸をト



ンと打つた。そして何にもいはずに微笑んで漸く紅を潮して來た東の空を仰いだ。遠くの方で鶏が勇ましく曉を告げた。

## 六 贖 罪

朝食を運んで來た宿の小婢は、竹島が、昨日の夕方とは違つていつもに優つた活き々々した顔付をして居るのを見て安心した。けれども、何時ものやうに串戯をいつたり口笛を吹いたりしないのを見て、やはり何か心配事でもあるのではないかと思つた。飯もいつもよりは輕かつた。そして日曜日でも半日だけは學校で過す習慣になつて居ながら、今日に限つて出かけないのも不思議に思はれた。

實際竹島の心は昨日と異つて元氣に充ちて居た。彼は和服に袴をつけて宿を出た。昨日停學處分をするやうに決議された磯田の家庭を訪問するためであつた。

磯田の家は町外れに近い場末にあつた。店先に駄菓子を並べた小さな



穢い家を見て竹島は、ハツと胸をいためた。ツギの當つた單物を着てセツセと臺所の後仕末をして届た磯田の母は、竹島の聲を聞き姿を見ると周章て、店先に出て挨拶をした。毎もは大抵店で用事を達して歸る竹島も今日は、「御迷惑でせうが一寸御相談したいことがあつて來たのですから上らして戴きます。」といつた。上さんの目は一寸曇つたが、直ぐに晴れやかになつて、「むさぐるしい所でまことに御恥しいことで御座いますかどうぞこちらへ」といつて先に立ち、店を通つて四疊半の座敷に案内した。かみさんは、竹島が止めるのも諸かずに茶を淹れたり、駄菓子を出したりしているくともてなした。竹島は何となく心に濟まないやうな氣持がしたので、かういはずには居られなかつた。

「おかみさん、實は今日辰二さんのことでお詫に來たんですから、どうか何にもかまはんで下さい。」

「お詫ですつて？　まアー」とかみさんは眉を寄せて「おわびにならこちらからこそうかゝはなくてはならないのです。ほんとにうちの辰も根が正直ですけれども、どうも氣性が親爺に似て荒々しくて、ほんとに困りますんですよ。昨日も、月岡様の坊ちゃんの手とかを折つたんですつてねエー。私はそれを聞いて本當に喫驚したんですよ。御存じでも御座いませうが、ずうつと前にうちが月岡様の土藏の壁の塗換に參つて居りました時に、何時の間にか土藏の中の品物が見えなくなりましたんですよ。そしてその疑がうちにかゝつたんでせう。根が正直でおまけに酒の上が悪いもんですから、旦那様と口論して居ります中に遂、カツとなつた揚句があつた仕末でせう。御覽の通り貧乏こそして居りますが、正直一方で通して來ましたものを、泥棒の悪名をつけられたばかりか暗い所に長い間入れられるといふやうな情ない譯になつた



んですからねエ……乙一の方は總領だけに、そしてまた師範學校に入つて居るだけによく諦めて居るやうですが、辰はあの通の氣性ですから、子供心にもふだん月岡様を憎いものと思つて居たんで、遂まアあんなことになつた譯なんでせう。人様の手を折るなんて辰も悪いには重々悪いのですが、月岡様の坊ちやんも、いくらなんでもあんまりだと思ひますよ。「手前なんかいくら級長だなんて威張つたつてね、手前の親爺はあれのうちの土蔵のものを泥棒して監獄にはいりアがつたんぢやないか」など、いつたんですつてね。」

「それなんです。辰二さんのおこるのは、正直な子としては當り前なことです。初めの中は辰二さんもジツと我慢して居たんださうですが、あんまり、『泥棒の子』『泥棒の子』つて大勢の前で口ぎたなくいふので、遂言ひ合が始つたんださうです。そして、なぐり出したのも辰二さんで

はなくて敏雄の方ださうですからね。それで私は昨日も學校の職員會で辰二さんを停學にするなら、敏雄も停學にしなければならんと何度も主張したんですが誰一人賛成して呉れないためにとうとう片手落な罰をする事になりました。辰二さんは勿論、お宅ではみんなどれ程かお腹立だらうと思つて洵に心苦しいのです。これも皆私の足らない所ですから、其のお詫をしようと思つて今日うかがつた譯です。實は昨夕うかがうつもりでしたが、おそくもなりましたし、それに少々考へる事がありましたので遂今日になりました。」

「いいえ、いきさつは昨晚うちが校長先生のお宅でうかがつて來てをりますし、殊に先生が何時も辰の御面倒を見て下さることは辰から毎うかゞつてかげながら御禮を申して居る所で御座いますよ。昨日も先生が大さう辰を庇つて下さつたといふことを小使の豊さんから聞い



てよく知つて居ります。それでうちも月岡には思ふ存分怨みをいひたいが、竹島先生に御迷惑をかけて恩を仇で返すやうなことになるつちや濟まねえから今度は我慢する。その代り、手前はえらくなつてお父さんのかたきと手前のかたきとを取れ。おいらの様に相手をぶんなぐつては、却つて暗い所にぶち込まれるばかりだからな、子供心にも忘れちやならねえぞ。大きくなつたら屹度えらくなつて仇を取つて呉れろとあの朴ねんじんみたいならちが涙を零してさう辰にいつて聞かして居るんですよ。辰もこんどはよつほど口惜しかつたと見えましてねエあなた、涙をポロ／＼零して、うん、おらア屹度立身してお父さんのかたきとおれのかたきとを取つて見せる。あんな敏雄のやうにお情及第ばかりして、金持の癖に中學にも入れなくて高等科に残つて居るやうな奴に負けて居るもんか。うちは貧乏でも學校ぢア成績のいいも

のが上だ。おぎふ何とかいふ人も豆腐から食べて勉強してえらい人になつたとか、西洋の何の何がしもどうとかしてえらくなつたから、あれだつて勉強すればえらい人になれる譯はあるまい。一心は岩をも通すだとか何とか申しましてね。」

かういつてかみさんは言葉を切り、心持頭をかしげた。

「時に先生の御舎弟様が東京の大學校に入つて居らつしやるといふのは本當で御座いますか？」

「ええ、それがどうかしましたか？」

「何、何でございますよ。辰が申しますには竹島先生の弟さんも十八とか九とかの年に、お友達の方に馬鹿にされなすつたがもとで東京にお出でなすつて新聞賣や牛乳配達をなすつたり、お車を曳いたりなすつて、今では何とか大學の優等生になつてお出でなさるさうだから、



おれも、その位になつたら東京に行つて、竹島先生の弟さんのお世話になつてえらい人になるとかう申すんでございますよ。それで私は、一體おまへは東京に出て何になるんだと聞きますと、辯護士になつてそれから國會議員になるんですつて。そして其の譯は、えらい辯護士になつてお父さんのやうな間違つて悪いことをして裁判所から罰をされるといふやうな時には、それをされないやうにしてやるし、それから國會議員になると、月岡さんのやうな學務委員よりも市會議員よりもづつと上で、議員ではそれよりも上のものがないんでお父さんのかたきも僕のかたきも早く取れるからなんですつて。私もこの話を聞きましてね、何だかかう勿體ないやうな、申譯がないやうな氣が致しましたんですよ。」

かういつて上さんは目をしばたゝいた。竹島も母子の心を思ひやつ

て深い感激に打たれた。上さんははなをすゝつて語をついだ。

「それに乙も根が弟思ひで御座いましてね、僕よりも辰の方が望みがありさうだから、卒業したら僕はどんな苦しい思ひをしても辰を大學校まで入れてやるとかう申すんでございますから。あれでも卒業しましたなら、どうかして辰を好きな所にやつて腹一ぱい好きな學問をさしたい思つて居ます矢先に、昨日のやうなことが出来たものですから何分にも行末が案じられて仕方がございません。」

竹島は上さんの話を聞きながらも、心は東京に居る自分の弟の身の上を思つて居た。彼も乙一兄弟のやうにたつた二人兄弟であつた。そして二人共子供の時代から秀才の聞えが高かつた。單に普通の秀才であつた許りでなく變り者であつた。殊に彼の弟の才能は十六七歳の頃からメキメキと鋒芒を現して、師範學校入學等を頭から馬鹿にして居た。そして



二十歳の時教職を抛つて飄然として上京した。竹島は誰よりも明らかに弟の才能を理解して居た。弟の人物を愛して居た。けれども其れは極めて消極的な理解と愛情とであつた。彼は弟の才能を助長し人格を練磨することについて何等の助力もしなかつた。そのために弟は上京してからも柔弱のからだをして教師もした。車も曳いた。新聞の賣子にもなつた。かようにいろ／＼様々な苦勞をしたが、それでも學資が足りなくて遂に借金もした。彼は借金するのは心苦しいがそれでもからだには代へられないと思つた。斯うして彼はこの夏〇〇大學の三年になる時に二度目の特待生の名譽を得た。そればかりでなく、彼は二十五歳の弱年で既にも文部省の檢定を二科目も及第して居た。それでも彼は職に就かうともしないで自炊をしながら屹々として勉強をつゞけて居た。彼の野心は今や極度に達して到底中等教師位で満足されるものではなかつた。然るに

竹島はこの弟の困苦を知りながら少しも進んでその世話をしようともしなかつた。勿論、世話が出来ないのでなくしてする氣がなかつたのだ。彼はこれまでこれを衷心恥ぢとしても居たし、又悔いても居た。而かも、彼は進んでどうしようとしなかつた。否彼は自分の弟をかまはない許りか、自分の妻子をも兩親をも郷里に置き去りにしてかまはなかつた。即ち彼は自分の野心を満たすために四年前郷里の學校と骨肉とを捨て、無理に縣廳のあるこの市に出たのであつた。そして、彼は茲で獨身者のやうに自由に振舞ひ、贅澤に暮して居た。彼は、弟が苦しい生活の中から兄を思つて送つて呉れる書籍を貰ふことも當り前のことの様に思ふ程心が冷淡にすれつからしになつて居た。……竹島はこのことを思出して感に堪へないやうな面持で、ソツとかみさんの顔を見た。

「あなた方が本當に辰二さんに勉強をさせるといふお考なら、私も及ば



ずながら御助力をします。若しかしたら私が辰二さんを今からお引受してお世話してもいいのですが……」

かういひ掛けて彼はハツとした。彼は誰にも明かさない決心をみだりに明してはならないと思つたからである。

「兎に角、お父さんが歸られたなら、こん度のことは大さう片手落な話ですが、私の力ではどうすることも出来なくて、遂に所罰をすることにきまつてしまつた。これはみんな私の落度だから私はどれ程うらみを受けても差支がない。その代り、辰二さんの將來のことについては及ばずながら御助力もするし、又私は私としてお詫もすると、かう話していたらききたい。それから辰二さんには、決して短氣を起したり、くよくよ思つたりしないで、勉強したりお父さんの御手傳をしたりして居るやうにと話していたらききたい。私は又明日の晩あたりうかが

ひするかも知れませんが……」

「ういゑ、そんなに御丁寧に仰つていただきましては却つて恐れ入ります。却つてこちらには先生に御申譯がございません。只辰は、先生を一通ならず御慕ひ申して居るのでございますから、あれの行末につきましまして是非とも御世話をしていたらききたいと思つて居ります。何れうちが歸りましたら、よく相談の上改めてうかがはせることに致します。」

竹島は重荷を卸したやうな、そして又新しい荷物を背負つたやうな心持で、この家を辭し去つた。



## 七 勝 利

竹島が宿に歸つた時は正午を少し過ぎて居た。小婢は直ぐにお膳を運んで行くと、彼はまだ仕度も解かずに机の前に端座して居た。心のせむか顔色が今朝とは違つてまた昨日の夕方のやうに曇つて居るやうに思はれた。

竹島は婢に晝飯は食べないから熱いお茶を呉れるやうにといつた。そして彼はそれをきつかけに着物を着代へた。

彼は續けざまに茶を三四はい飲んでから、始めて我に復つたやうにホッと息を呼いた。そして一時間前の光景を歴々と目に描いた。と、心が煮えかへるやうに興奮して來た。そしてまたその興奮の中にいふには、れないやうな爽快味が交つて居ることを感じた。彼はこの感じは勝利の

快感だと思つた。正義の快感だとも思つた。

彼は磯田の家を出ると直ぐ月岡の家を訪れた。彼は豪華な玄關の前に立つといはうやうのない反感が起つて來るのを感じた。それと共に甚だしい羞恥を感じた。これ迄彼は、只の一度もこの玄關には手土産なしに立つたことがないことを思ひ出したからである。それを思ふと、素手で、而かも反感を懷き乍ら立つて居る今日は、いつもより足がしつかり地に着いて居るやうな力強さを感じた。更に彼は、今日はこの家の主人を敵として來たことに思ひついて一段の心地よさと力強さとを覺えた。

彼は座敷に通されてからも、何時ものやうに女中にさへ丁寧に頭を下げたり、輕薄なお世辭をいつたりするやうなことをしなかつた。彼の心が毅然として強味を持つて居たやうに、彼の姿態も端然として威儀があつた。やがて主人は其處に出て來た。彼はいつものやうに傲慢な態度や



言葉遣で竹島に對するものであつた。竹島は今更のやうにこの人間の劣等な性格を輕蔑すると共にこんな劣等な人間に頭を下げて來たこれまでの自分と、一般の小學教師の生活とをみじめにも恥しくも思つた。そして今日こそは男一匹の體面を立派に保つて行かなくてはならないといふ覺悟を固めた。

竹島は、この覺悟を立派に實現して來たことを思つて今更のやうに痛快を覺えた。甘言や威嚇を以て執念く彼を追ひまはした月岡の誘惑と壓迫を極力しりぞけて、彼は自分の信念を貫いた。彼は徹頭徹尾敏雄の罪を難じたばかりでなく、再三敏雄をして辰二に謝罪させることの正當であることを述べた。

「教育のことは、地位とか身分とか貧富とかに依つて左右さるべきものではないと思ひます。一般の社會が不公平であつたり、情實に囚はれたりして居るにつけても、せめて學校生活だけは公平な正義な純潔なものにして行きたいといふのが私の理想です。私にとつては敏雄さんも辰二さんも同じやうに教へ子です。どちらも大切な教へ子です。併し、正直にいへば人間の價值から見ると私は辰二の方は一層よい子だと思ひます。それだけ私はあの子一人を所罰するに堪へません。殊に今度のことは負傷さしたといふことは勿論辰二の罪ですが、それとても全くの過失罪です。或る意味では正當防禦です。敏雄さんが喧嘩を吹きかけて自分が先に擲つたのですから、正直にいへば罪は却つて敏雄さんにあります。只辰二は不運なだけです。これが若しも實際と反對に辰二が負傷でもすれば、辰二のうちではお宅から見舞金でもどつさり貰へたかも知れませんかね……兎に角公平に見れば道德上の判断は極めて明らかです。ところが、御存じのやうに、職員會では、



不思議にも辰二だけを罰することにしました。私は極力これに反対しましたが結局駄目でした。そしてこれは恐らく敏雄さんがあなたの子さんだからといふのだらうと思ひます……私はこの決議には勿論不服ですが、あの学校の職員の一員としては、職員會の決議に従はなければなりませんから、辰二を所罰することに致しましたが、敏雄さんの教師としての私は教へ子の罪を其の儘にして置くといふことは出来ませんから、今日は是非ともあなたの御承諾を得て、表向の罰を受けない代りに、辰二に謝罪だけはさしていたゞきたいと思つてうかつたのです。」

彼は先刻の自分の言葉を思ひ出すと共に、傲慢なそして激怒した月岡の油ぎつた顔色を思ひ浮べた。月岡は竹島の言葉の終るか終らぬ中にならざるやうにかう叫んだ。

「馬鹿仰しやい！ 手を折られた上に謝罪などが出来ますか。殊にあんな貧乏人の子に！」

竹島はこの言葉を聞いて恰かも勝利を得たかのやうに勇み立つた。何が馬鹿仰しやいです。靜かに考へて御らんなさい。敏雄さんは如何にも肉體に傷を受けました。けれどもそれはお金で癒ります。が辰二が敏雄さんから與へられた心の深傷は金では癒りません。心の傷は只心の看護で癒す外はありません。貧乏人は肉體や物質を望んでも得られませんから、せめても心の健康だけを望んで居ます。貧乏人が金銭のために富有者に頭を下げなくてはならないやうに、心の貧しいものは心の富めるものに頭を下げなくてはなりません。悪いことはたとひどんな金持がやつても悪いことです。そして悪いことをして謝罪することはどんな地位の人にとつてもよいことです。泥棒呼ばはりをする



れた外に所罰を受ける貧乏人の不幸も少しは察してやつて下さい。私は心の貧しいものに最良をすることは出来ません。」

「それぢや君はうちの子の心が貧しいといふのですか？」

「勿論です。」

「何故？」

「十二や十三の子供の癖に父の身分を笠に着たり、金持を鼻にかけたるりするばかりか、ふだん學問で負けて居るうらみを悪口雜言で晴さらなどとする心が私にはたまらなく貧しいのだと思はれてなりません。それでもあなたはあなたのお子さんが立派な心を持つた子供だと思ひになりますか？」

竹島は、この言葉を聞いて月岡が無言で顔を顰めたことを思ひ出して嫣然とした。と彼は又今更のやうに腹立しく感ずることを思ひ出した。

「それぢや、君は何處までも私を敵とするつもりですね。君は私が君を新らしく出来る學校の校長に推薦して居ることを知つて居ながら。」

「外のことならとに角、このことは昨日學校全體を敵として戦つて来た位ですから、何處までも私の意志は通します。」

「今の地位も將來の昇進を犠牲にしてもですか。」

「勿論です。そんなつまらないものは！」

「勿論ですつて？ そんなつまらんものですつて？ しかとさうですか。私は市の學務委員ですよ！」

「あなたが學務委員のやうな教育に關係のある職務を持つてゐらつしやるからこそ、かう申し上げるのではありませんか。お序でだから申しますが、昨日の竹島と今日の竹島とは人間が少し違つて居ます。今日の竹島は生地竹島です。本當の竹島です。七年前に師範學校を卒



業する時に一騒動起したあの竹島です。金や名譽や地位やを欲しがつて居た、有力者に頭をベコ／＼下げて乞食のやうに穢れて居た竹島は昨日で死んだと思つて下さる。」

竹島はこの言葉を思ひ出していはふやうなく痛快を感じた。「さうだ。穢れた竹島はもう死んだのだ。いや是非とも殺してしまはなくてはならない。ここでおれが本當のおれに歸らなくては復活の仕様がななのだ。おれは今本當のおれになりかゝつて居る。」かう獨語して力強く左の胸を打つた。そして急に元氣よく手をならして婢に食事を命じた。

竹島は一通の書状を認めた。

先生。突然で嘸お驚きのこと、存じますが、豫て御願して置きました

第四小學校長御推薦の議は御取消しを願ひます。實は私この一兩日精神上に大きな革命が起つた結果としまして、あらゆる野心を捨てたいやうな心持になつたのであります。當市の學校のやうな大きな學校の校長になるといふことは、一方から考へて見ますと、教師として如何にも名譽のこのやうに思はれますが、其れは本當の教育者としての名譽ではなくて、寧ろ本當の教育からかなりかけはなれた、いはゞ事務家としての名譽だと思ひます。私の本當の欲望が、若しも事務家として成功することにあるのでしたら、喜んで校長にもなりませう。否、本當にさうでしたら寧ろ私は教育界を捨て、他の官界なり實業界なりに向ひます。そしてもつと華々しい生活をします。思ふ存分に働きます。けれども教育界に止るかぎり、私は現今の大きな學校の校長のやうに、教育の事務だけを見て實際の教育、直接の教育を第二段と見るやうな生活には到底堪へ



られません。即ち事務家としての私の野心が一度満たされた限り、現今の小學校長位な地位で安心するやうなことは決してないし、さうかといつて、本當に教育者としての安心満足を得ようとするれば、これまた現今の一流學校の校長の地位に止ることも出求ないといふデイレンマになるのが私の境遇で御座います。てつく／＼考へました結果、事務家として成功するといふやうなことよりは、寧ろさういふ野心を全く捨て、もつと純な、もつと高潔な、もつと精神的な方面で自分の全力を盡して見ようといふ決心がついたので御座います。名譽とか地位とかいふものをすつかり捨て、仕舞つて、只私の一個の人間としての力を十分に遺憾なく發揮することに全力を致さうと思ひ定めたので御座います。そしてさうするには、出来るだけさういふ野心に對する刺戟の少い所がよいと思ひます。殊に、私が本當に教育者として恥しくないやうな生き方をする

ためには、出来るだけ兒童の數の少い所がよいと思ひます。千人も千五百人もあるやうな學校の校長をして居ては、とても教育の本當の味も解らなければ、また教育者としての本當の力を發揮することも出来ないこと、信じます。全校の兒童を残らず知つて居て、全校の兒童残らずに自分の感化影響が及ぶ所でなければ到底駄目だと思ひます。それからちよ／＼轉任の心配のある所では、とても落付いて本當の教育が出来る筈はありませんし、本當の教育者としての力を發揮することも出来る筈はありません。五年や三年で東へ遣られたり、西へ遣られたりするやうなことでは、とても教育の効果も何もないと思ひます。否、只長い間同じ所に就職して居るだけで、其の土地と密接な關係がつくのでなければこれ亦本當の教育が出来ないと思ひます。土地の有力者や、學校關係者の心も知らず、父兄や家庭の有様も知らずに、學校の中だけでどれ程熱心



に努力をしたからといつて、其れで教育の効果が本當に擧る譯のものではないと思ひます。をこがましいことですが私の信念では、本當の教育者は、子供の教育者であると共に父兄の教育者であり、其の土地の教育者でなくてはならないと思ひます。そしてさうするにはどうしても、教者は自分の任地を自分の墳墓の地と覺悟するやうでなくてはならないと思ひます。その土地が少し許の落度や缺點で直ぐに教育者を他に追ひ出すやうな冷淡な所でないと共に、教育者も亦少しばかりの不平や不満で直ぐに他に逃げて行くやうな輕薄なものでないやうでなくては駄目だと思ひます。即ち教育者が其の學校なりその地方なりを墳墓の地として愛すると共に、其土地の父兄がまた教育者を自分達の郷先生として敬愛するやうでなくてはならないと思ひます。

私はいふ考から名譽も野心も捨てました。否この決心、この希望

は決して昨日今日急に起つた一時の出來心ではありません。實にこれは私が師範學校の三年生の時に芽ぐんだものです。それが學校卒業後次第に下劣な欲望のために虐げられて遂に今日に至つたので御座います。幸にして、私には未だ私らしい血が通つて居ました。幸にして私は生地の人に返ることが出來ました。過去は責めません。只今日の私は私自身の本當の要求に裏切り、本當の自分を偽る苦悶に堪へません。斷えず裏奥に不安と苦悶とを感じながら表面冷たい笑を湛へて居る虚偽に堪へません。私は只本當の小學教師になれさへすればよいのです。小學教師として本當に満足されさへすればよいのです。私の名などは多忙なそして輕薄な世間から間もなく忘れられてもよい。私の裏心望む所は只私の感化が私の教育者としての愛と權威とが永久に私の教へ子——それがたとひ只一人であつても——の生命の中に本當に力あるものとして残りさへす



ればよいのです。私の生涯が「小學教師」の肩書の下に小さな一村落に永久に傳へられさへすればよいのです。

先生。私はこれまで永い間先生の篤い恩顧を受けて來ました。そして今一息で世間並の教師になれるといふ瀬戸際でこの様な勝手なことを申し上げねばならぬやうになりました。嗚かし先生は思知らず、義理知らず、嘘つきと御憎しみなさるでありませう。けれども、私は決して先生の御恩を忘れた譯でも先生に對する義理を蔑視した譯でも乃至は、嘘をつかうと思つて嘘を吐いた譯でもございませぬ。否、私が先生の一時のお怒りを恐れて、このままで居るならば、私自身は勿論のこと益々先生をあざむき、先生の高恩をいやが上に仇で返すやうになることを怖れて居るのでございます。否、非難し憎惡すべきものは先生を欺いたやうに見える今日の私ではなくて、實は先生に對して忠實であるやうに見えた

今日までの無自覺な私でございます。私は、それを何よりも深く、先生に謝さなければなりません。假りに自己を本當の自己として、その假りの自己に對して先生から高恩を受けて居たことを衷心謝さなければなりません。今はもう到底この虚偽の生活に堪へません。この二重の生活分裂の生活矛盾の生活に堪へません。先生が私を御憎み下さるのは洵に當然なことでございますが、私は何よりも先づ自分に取つて恥しくないやうな生活をしなくてはなりません。そして、これまで先生を欺き奉つた大罪を謝すると共に、先生から受けた高恩に酬いる道だと思ひます。先生、どうぞいつはりなき心情を御諒察下さつて私のこれまでの罪をお許し下さい。そして先生にして本當に私を愛して下さいならば私の今日の自覺を祝して下さい。今日の再生を喜んで下さい。私の心は今これまでの罪を悔いると共に、復活の曙光のまばゆさに眩惑して居



ります。何れ一兩日中凡ての決心や方針が定つてからおうかがひして親しく御話申上げます。

竹島は小婢に佐藤といふ縣視學にこの手紙を持つて行くやうに命じてから、彼は行李の中の整理などをした。悪辣な月岡が如何なる手段を講ずるかも知れないと思つたからである。そして彼は大行李の中から、はしなくも一束の手紙を見出した。それは凡て彼の妻から來たのであつた。日付は四年前當市に彼が轉任した直ぐ後の頃であつた。

彼は手紙の束を見乍ら今更のやうに懷舊の情に打たれた。それと共に彼は深くも悔恨の情に打たれた。彼は彼の妻の聰明を今漸く發見したかのやうに思つた。彼は急いで結んだ紐を切つた。そして心當りの日付の

ものを三四通抜き出して読み始めた。



## 八 眞 實

.....御立身はお嬉しう御座いますが、果してこれがあなたさまの本當の御立身かどうかと考へますと、私には、心の底からお嬉しいと申し上げることが出来ないやうな心地が致されてなりません。この度の御地位は、最愛の妻——私は深く深くさう信じて居ります。そしてまた私の心にこの信念がありますればこそ、この味氣ない世も歎ひの光に輝くのでございます。——と最愛の子をお捨て遊ばしてまでもお求めになる程それ程尊い、それ程高價なものとはとても思はれません。若しも私に御相談の上の御決心でございましたならば、私は屹度私の力限りお止め申したで御座いませう。これまでは、不束な身とも思召さず何事も御相談下

さいましたものを、この度に限つて、御實行前に一言も仰つて下さいませんでしたのは、何故で御座いますか。甚だ失禮な申分で御座いますが、この度のことはあなた様の御心にも必ずや幾分御うしろめたい所が御座いましたからでは御座いませんでせうか。若しもあなたさまが仰しやいませした様に、この度の御轉任を本當に御満足とも御幸福とも思召して居らつしやいますならば、あれ程愛して下さつた妻の私に御知らせ下さらぬ筈は御座いませぬ。私がいづもあなた様の御満足を自分の満足とし、あなた様の御幸福を自分の幸福として居りますことを知つて居らつしやりながら、その妻の私に、あなたさまの本當の御満足と御幸福とをお別ち下さることに御猶豫遊ばす筈は御座いませぬ。勿論私にしやしても、世間並に御昇給遊ばすことを嬉しいと思はぬ譯は御座いませぬ。いいえ、出来ませうことならば、百圓が二百圓にもお昇り遊ばしていただきたいの



で御座います。けれども、僅かばかりの御昇給や御立身のために、何ものにも代へ難いあなたさまのお心が、あなたさまがふだん口癖のやうに仰しやつておいで「魂の童貞」が傷つけられますならば、それが何になります。聖者のお訓めを拜借致すまでもなく、精神生活に生きようとしてます人が「全世界を得るとも魂を失つて」は何になります。私はあなた様の御立身をお喜び申し上げますよりも、寧ろ悲しいことのやうに存じられてなりません。あれ程高傑な理想を懐いてお出でなされたあなた様が、それをお捨てなされて、限りのある僅かばかりの地位を目當てにふだんあれ程さげすんでいらした「俗物共」とこれから生涯御競争なさいますことは、私にとつてはこの上もない悲しみで御座います。「妻子を捨てて元の書生のやうに勉強したり活動したりする」といふことは、見方によつては如何にも勇ましいことのやうに思はれも致しませう。けれども、本を讀

んだり、地位を争つたりなさることは、本常の教育者を目的としておらつしやるあなた様にとつてそれ程大切なことで御座いませうか。最愛の妻子を捨てる程それ程大切なことで御座いませうか。夫の君様、どうぞもう一度静かに静かに御反省下さいまし。何卒もう一度御卒業當時のことを思出して見て下さいまし。

夫の君さま。私は勿論あなた様一人を杖とも柱とも頼んで生きて居るかよはい女で御座います。けれども、私が杖とも柱とも頼みます方は、世間的な名譽や地位などを一笑に附しておしまひなさる方です。「魂の童貞」を處女が「貞操」を尊ぶやうに命にも代へて大事がつて居らつしやる方です。千萬人に對して淺薄な愛情を注ぐよりも只一人に對して底まで徹するやうな深い愛を注ぐことを喜びとなさる方です。醜い社會の輕浮な毀譽褒貶を超越して、凡てをうちに求めることを誇りとなさる方です。



王侯貴人の嚮應よりも田舎乙女の一掬の清水に對して一層深い感謝をなさる方です。私が心からさういふ方と信じてとこしへにお頼み申して居ります方は、何のために此を彼にお代へなさらねばならなかつたで御座いませうか。私にはそれが何よりも大きい、そして恐ろしい疑問で御座います。いゝえ決して私は「疑問」そのものを恐れて居るのでは御座いません。私は只その疑問を解決する「理由」を知ることが何よりも恐れ何よりも悲しんで居るので御座います。

全世界にも代へて愛しまゐらするあなた様。私がかやうに申し上げましたならば、あなた様は或は女の愚痴として御笑ひになるかも知りませんが——いいえ、私の信じてをります本當のあなた様ならば決してそのやうなことがない筈で御座いますけれども——決して私は通一遍の愚痴をこぼしたり空涙を流したりして居るのでは御座いません。只私はあな

た様が邪道に陥り遊ばすことを何よりも悲しいことと思ふのでございませす。本當にあなたさまのおためになりますことなら、五年や七年はあるか、たとひ何時までも孤獨を守つてをります。けれども、あなた様のあ心を害ふために私は私の愛と幸福とを犠牲にするやうな偽善には堪へられません。どうぞ、はかない夢に迷ひ遊ばさずに、本當にあなた御自身の生活を遊ばして下さい。私は虚偽と情實と權謀術數とで固め上げられた世界の中でほんの僅かばかりの立身出世をなさるために、ほんの一時的の幸福と満足とをお求めになるために——私は到底これがあなた様に永久の幸福と満足とを與へることとは信じられません——尊いあ心を傷め遊ばすことをこの上もないいたましい悲しいと思はれてなりません。何卒いつはりの幸福のために本當の御幸福を御損ひ遊ばさぬやうに呉々もお願ひ申し上げます。勿論私は、一旦御決行遊ばしたとに對して、



今直ぐどうと申上げるのではございませぬが、どうぞ御ゆつくり御反省遊ばして、若しも私の申上げますことに幾分でも眞理が御座いましたならば、言葉の上の無禮は御ゆるしの上何卒／＼御さゝ入れ下さいまして、再び本當に私の信じ頼んで居りますあなた様におなり遊ばす幸福な日が、一刻も速く近づきますやうに、神かけて祈り上げます。……………

□ ……………悲しい夢が幾夜も幾夜もつづきました。さなきだに寂しい時雨の夜半に悲しい夢からふと醒めて、更に悲しい現に泣くかよはいをんなの身をあはれとも思召し給ふか。寝ても醒めても、夢にも現にも孤獨と悲哀と寂寞とを癒すによしなき、はかないをんなの心をいとほしとも思召し給ふか。秋の夜半の物かなしさに堪へ兼ねて、懐かしの君の御名を口ずさみつつ、うまゐした坊やをいだいてその紅の豊頬に熱い熱い涙を

流す脆いをんなの境遇を氣の毒とも思召し給ふか。女々しと笑ひ給はば笑ひ給へ、心弱しと嘲り給はば嘲り給へ。女の身にとつてこよなき幸福は名を獲るとにても地位を獲ることにもなくて、只まことの愛にひたることなれば。……………

□ ……………御手紙によりますと、この頃は下さうお忙しさうで御座いますね。おからだにおさはりがいかと案じるだけならまだしも、そのやうな御多忙な處では、あのお美しい、あの澄み切つた御心が幾分か傷つけられるやうなことはないかと、私には一方ならぬ心配で御座います。殊に、また、近い中には御昇給遊ばすとのこと、尙更心配でなりませぬ。たとひお身分は如何様にお變りなさいますとも何卒々々いつまでもいつまでも昔の清い氣高いあなたさまであらせられるやうに神かけて祈り上



げます。……………

□

……………あまりの物寂しさに、昨夜は坊やを寝かしてから古い、あの私の一生中一ばん楽しかった時の日誌を出して読んで見ました。どなたか「過去は悲しい」と仰しやいましたが、私はやはり樗牛先生のやうに「追懐は凡て美なり」と申したう御座います。さうです、實際私にとりましてはあの當時程楽しいそして清い生活をした時はございません。二人の心は常に高潔な理想に燃え、二人の心は断えず純真な神聖な幸福に酔うて居ました。どれ程大きな社會の出来事も私だちの幸福を棄すことが出来ませんでした。どれ程大きな顯榮も私達の志を奪ふことが出来ませんでした。私達は只々、うちの世界に、自由に、正直に、大膽にそして力強く生きる事が出来ました。恐ろしいもの、美ましいもの、誼はしいもの、満た

されないものは何にもありませんでした。それは、凡てをうち求めたからです。凡てを我自らにたよつたからです。それに比べますと、今の生活は、ああ何といふ寂しさでせう。ああ何といふ物足らなさでせう。私は、今更乍ら人間の力の弱さをしみじみと感じました。けれどもこれも皆私の愛の力が弱いからだと思ひます。私はあなたをうらみませない。私は只一筋に私の信ずる道を進むより他には致し方がありません、私は只どこまでも私の初一念を貫くより他には道がありません。たとひ、それが、只今のあなたの御心に背くやうなことが御座いませうとも、恐らくは、本當のあなたの御心に従ひまつる道かと思はれます。何卒御いとまのをり／＼には過ぎし日の清い幸福を御思出し遊ばされるやう呉々も御祈り申し上げます。……………

□



.....この頃坊やがしきりに「お父さんは？お父さんは？」とお慕ひ申しますには、私もほと／＼當惑致してをります。失禮ですが百千の他人のお子達をお育て申しても大事なく、自分の子を捨てて置いては何にもならないやうな心地がいたされます。母親だけが子供を育てる義務があつて父親にはないやうに思はれて居ることも、または子供のことなどに少しも懸念しないやうな男子がえらい男子であるかのやうに思はれて居ることも、私には間違としか思はれません。殊に「教育者が自分の子を教育しない」といふこと程大きなそして恐ろしい矛盾がないやうにも思はれません。.....

□

.....「息子を持ちながら嫁の世話にばかりなつて居ることが心苦しい。」御両親様はこのやうなことを時々仰しやいます。私も御尤なことと思ひ

ます。匡さんは二男でいらつしやいますから兎に角、あなたは御家督でもいらつしやるし、殊には匡さんとは違つてどちらの學校にお務めになりましても大した違ひはございません様ですから、御両親様の御心では僅かな俸給のために遠くはなれていらつしやることを心寂しく思つていらつしやることだらうと思ひます。.....

□

.....「新らしい校長は親しみが無い。竹島先生が村の人だけに學校のことを自分のうちのとのやうに思つて居られたのは大した違ひだ。」村の人々はこのやうな話を話して居たさうです。「自分の村に學校がありながら、そしてあんなに村の人から大事に思はれながら、竹島先生な何が不足で轉任なすつたのでせう。たとひ、少し位給料がふりなすつたつて〇〇市のやうな所では入費が餘計かかるから、結極損でせうに。」このや



うな話も耳に致します。「そんなに給料が望みなら、村でも決して上げないといふ譯ではないから、それならさういつて下さればよいのに、何とかして戻つて貰ふ工夫はないかなア？」助役さんがいつかこんなこともいつて居られました。……………

竹島は讀むに堪へないやうな面持で、妻からの手紙を一たばねにして行李に押し込み、暫らく目を瞑り腕を拱いてゐたが、やがて幾分晴やかな顔でも一つの手紙の束を取り出した。それは弟の匡ただしからのであつた。彼は其の中から出たらめに一本引き抜いて讀んで見たが、半ばにして如何にも讀んで悪いものを讀んだかのやうなかるい恐怖を感じた。彼の心には「東京」といふ文字さへ異様な誘惑を感ずるのであつた。殊に弟の手紙

の中に表はされて居る世界は彼には自分の世界とは全く異つた世界のやうに思はれた。其處には眞劍の氣が充ちて居た。三度の飯を二度に節したり、寢食の時間さへも吝んだり便所の中でさへも本を讀んだりして専心勉強に耽つて居るやうな緊張した一本調子の世界であつた。二十五歳の今日まで只の一度も紅い燈の光を見たことのないやうな几帳面な純潔な世界であつた。五年の間只の一夏さへのんびりと休んだことのないやうな汗みどろの生活であつた。初一念を貫くためにはどんな苦勞も辛慘も意としないやうな執着の強い生活であつた。彼の生活には安心があつた。信念があつた。理想があつた。根柢があつた。焦點があつた。力があつた。火があつた。彼の生活は、偏に自己最深の要求に誠實ならんとする彼自身の生活であつた。偏に主觀の純眞を尊重する自己信愛の生活であつた。偏に、うちからの力で動いて行く自律自由の生活であつた。偏



に深く堀つて行く徹底的生活であつた。偏に内に沈潜して行く内的生活であつた。彼は竹島に向つて幾度かかういつた。「名譽や地位や金を望むなら、斷然精神事業を捨てなくてはならない。精神事業に満足を得るなら斷然名譽や地位や金を捨てなくてはならない。この二つは「エンタープライゼン彼か此か」の關係にあるものだ。若しこの兩方に野心を持ち、兩方を十分に満足せしめようとする時には、非常に優れた人でないかぎり、其の人の生活は必ず墮落する。少くとも分裂矛盾の悲劇となる。」そして結局彼は「彼」を捨て、「此」を捨てたものである。偏に精神生活の王國に君臨しようとするものである。

竹島はから思ふと、弟の進む道はやはり自分の進むべき道であることを悟つた。彼は再び一度捨てた手紙の束を手にした。そして其の中から心當りの日付のものを二三通抽き出して其の中味を改めて一通を開いた。

兄さん。思ひながら御ぶさたしました。この頃は前のやうに、手紙を書くやうな氣持には容易になれません。殊に兄さんに對してはさうです。去年あたりまでは、かなりに懐しい氣持がしましたが、この頃は兄さんのことを考へると何となく心苦しく感じられます。手紙を書かうとする時、只何となく御意見を申し上げねばならぬやうな氣持がされてなりません。私にはそれが何よりもつらいのです。けれども他人なら兎に角、只一人の兄さんのお身の上を黙して見て居る譯には行きませんから、今日は思ふ所を申し上げることに致しました。失禮のところはどうぞお宥し下さる。

兄さん。あなたは何を目當にあの自然も人情も美しい郷里を捨て、○



○市へ御轉任になりましたかを本當にどん底まで御反省なすつたことがありますか。あなたは輕薄なそして俗惡な市内の學校から何を獲ようとなさるのです。まさかあなたは僅かばかりのはした金のために自分の節操を售らうとして居られるのではないでせうね。私はあなたが市内に轉任して所謂「昇進」なすつたために、日一日と輕薄な俗惡な者共の仲間入をされることをこの上もない悲しいことと思ひます。日一日と教育者の本領から遠ざかつて行かれることをこの上もない悲しいことと思ひます。勿論それが本當にあなたの御希望であるならば私はあなたの自由意志を束縛しようとするものではありません。只あなたの意志が、本當に自由に本當に自律的に本當に自覺的にはたらくのではなくて、寧ろ他律的に、沒自覺的にはたらくことを悲しむのです。改めて申すまでもなく意志の自由は其の人の理想即ち最深要求に従ふといふことであつて、決して只

量的な意味で最強の要求に従ふといふことではありません。然るにあなたの近頃のお生活は、甚だ失禮ですが嚴密な意味の最深要求に従ふのではなくて、只目前の最強要求に従ふ生活だと信じます。如何にも表面的には、物質的要求は精神的要求に比して強烈に感じられます。けれども、この表面強烈な物質的要求の満足が直ちに吾々に全體的の満足を與へるものでない所にこそ、精神的要求が物質的要求に比して一層強烈であることの證據があるのではありますまいか。一度も精神的要求に目覺めないものは止む。苟くも一度でもこの要求に目覺めたものは到底永遠に消すことは出来ない。若しもこれを消したと思ふものがあるならば、實は自らを欺いて居るのであります。自らを裏切つて居るのであります。自己の本當の姿をまともに見る勇氣と誠意とを缺いて居るのであります。自己其のものゝうちからの力に従つて動くことが出来ないためです。一



言にすれば、自己を本當に信愛して居さへすれば、本當の自己が何であるか、自己の本當に望んで居るもの乃至本當に望むべきものが何であるかを正しく理解しないでは居られない筈だからであります。

兄さん。どうぞ心を冷靜にしてこの點をどん底まで思ひつめて見て下さい。そしてあなたの最深要求が、精神生活の方面でなくて、物質生活の方面にあるならば、毀譽褒貶などを一笑に附して斷然今の職業をお捨てなさらなくてはなりませんし、若し又其の反對であるならば、これ亦今の地位を捨て、出来るだけ閑靜な、出来るだけ物質的要求の誘惑の少ない地位を選ばねばなりません。勿論、私は必ずしも今の地位で高い精神生活を生きることが絶対に出来ないと思し上げるものではありません。たとゝそれをするには、大偉人でない限り非常な大勇猛心が必要だと申し上げるだけです。都會地には吾々を邪道に陥れる多くの誘惑があります。

殊に、都會地の學校で、少しでも所謂「成績」を挙げようとか、地位を高めようとかいふやうな方面に志を向けるならば、必ず本當の教育者といふものから遠ざかつて、形式的な皮相的な、俗吏となり、事務家となつて仕舞ひます。かうして其の精神生活は次第に俗吏として、事務家としての生活に虐げられ食み減らされて仕舞ひます。本當に精神生活を生きようとする人は、何よりも先づ物質生活に大死一番、否大活一番しなくてはなりません。然るに都會地はその大死一番大活一番を許しません。たとひ自らは名を求めなくとも環境が自己に向つて名を強要します。たとひ自らは一人を潔うしようとしても環境は自己の周圍を濁します。私があなたの御轉任に反對した理由は茲にこの點にあるのです。——ああ、強さうにして甚だ弱いものは人間です。理想は如何に高くとも、要求は如何に強くとも、理想が直ちに現實でなく、要求が直ちに事實でないこ



とを忘れてはなりません。

精神生活を求めるものは何よりも「名」を捨てなくてはなりません。自己乃至自己の生活の価値を自己自身が的確に評価し、自己自身が十分に體認することが出来るやうでなくてはなりません。他の人々の軽浮な「評判」といふものにうつた自己を本當の自己と思ふやうでは、到底眞の精神生活を生きることが出来ません。孔子の所謂「人知らずして憤らざる」又は「孤を愼む」人にしてのみ始めて眞の精神生活に入ることが出来ます。さうです。精神生活に生きる人は孤獨を愛する人です。自らに求める人です。自らを信じ愛する人です。結果を思ふよりも先づ動機を思ふ人です。事業を思ふよりも先づ人格を思ふ人です。饒舌の人よりも沈黙の人です。量を思ふよりも質を尊ぶ人です。廣さより深さを重んずる人です。萬人をよい加減に愛するよりも只一人を十分に愛さうとする人です。問題

に大小の區別を付けないで問題に對する主觀の態度に高下の區別を置く人です。名もない野の草花に宇宙の默示を読み得る人です。自己の胸奥に人間性の眞髓を見る人です。自己の胸奥に宇宙の神秘をさぐる人です。自己の胸奥に赤子の姿と神の姿とを見る人です。刹那に永遠を見る人です。

兄さん。人生は永遠に只一度です。左顧右眄、朝定暮改、何等の操守なく主義なく信仰なく自矜なくして生きて行くこと程悲しい事はありません。生活の價値は主觀的に見れば、其の人がどれ程十分に自分の先天的に具有する本質性を發揮し助長し完成したかといふ事にあるし、客觀的に見れば、どれ程人性を深め高めたか、どれ程深く人生の神秘をさぐつたか、どれ程新しいものを創造したかといふ事にあります。随つてこの意味に於て價値ある生活を生きるためには、自己に徹する外はあり



ません。自己の本質性を極度に助長し、自己の真要求を極度に深めて、特色の彩やかな独自の——嚴密に自己自身の生活を生きる外はありません。自己の本心を偽り、自己の本性に背いて出来合の價值標準にうまく撥を合せて行かうとするやうな卑怯な輕薄な不徹底な人間に生の醍醐味を十分に味へられる譯はありません。人間生活の深刻さと個人格の權威とを本當に味制し得られる譯はありません。

斯くはいふものゝ、私は決して向上心を詛ふものではありません。あきらめ主義をすゝめるものではありません。迴避生活を讚美するものではありません。文字通に兄さんに隱退をすゝめするものではありません。否々、私は本當の意味で兄さんの向上を祈り、進取を祈り、冒險を祈り、努力を祈るものです。要は、兄さんに本當に確信のある、本當に安心のある教育者になつていたゞきたいといふことを、衷心より希ふも

のです。自分の生活の價值を外面に求めないで内面に求め、眇たる小學教師でありながら其の生活の價值に於ては聖賢に比肩するに足るやうな充實した深い高いものであるやうにあられることを呉々も祈るものです。どうぞ、心を空しうして深い自覺の境域に御達しになるやうにして下さる。これが私の兄さんに對する弟としての唯一の御願です。



## 九 沈黙の權威

竹島は静かに手紙を巻きをさめた。彼は、嘗ては反感と苦悶とを以て讀んだ妻や弟の手紙が、今は何等の反感も苦悶も感ずることなしに、點頭しながら含笑みながら讀むことの出来るやうになつた自分の心を喜ばずには居られなかつた。彼はもう妻や弟の苦言を恐れる必要もない程自ら自分自身を責め、自分自身を難じ、自分自身を詛つて居た。だから彼には妻や弟の手紙は、彼に對する非難や憎惡ではなくて、凡て彼の目下の心境と決心とに對する讚嘆と激勵とのやうに感じられた。彼には今こそ何等羞恥も懊惱も感ずることなしに妻にも弟にも面接し歡語することが出来るやうに感じられた。彼は今こそ何等の苦悶なしに自分の意志を決行し、自分の好む所に向つて幕進することが出来るやうに思はれた。

否、彼は妻や弟は勿論、たとひ世界の凡ての人が擧つて自分に反對したとしても、自分は自分の意志を貫くことが出来ると感じた。自分の意志を貫かすには止まないと思つた。彼は今こそ本當に喜び勇んで自己に——自己の誠意と信念に殉し得るのだと思つた。彼は今こそ何等の疚しさと不安とを感ずることなしに、精神生活の價値と權威とを力説高調することが出来るのだと思つた。否、今こそ何等の揚言も何等の辯解も、何等の約束もすることなしに、永しへに沈黙した、併しながらこぼれるやう微笑を湛へ、かがやける瞳を以て四年間住み慣れたこの土地を去ることが出来るのだと思つた。四年間の並ならぬ努力によつて漸く購ひ得た、地位と名聲とを潔く捨てることが出来るのだと思つた。何等の不滿なしに、邊鄙なけれども美しく清い自分の生地に歸つて、小さな學校の椅子に座ることが出来るのだと思つた。何等の隔離なしに最愛の妻子にも兩



親にも知人にも面接することが出来るのだと思つた。

彼は、恰かも師範學校卒業當時のやうな純潔な興奮と緊張と充實と歡喜とを覺えた。けれども、彼はこの心を何人にも語りたいたも思はなかつた。只靜かに自分一人の胸の中に秘めて置きたいと思つた。彼は師範卒業當時の心と今の心とを比べて、表面似て居ながら而かもその間に酷だしい隔離のあることを感じた。彼は勿論七年前の自分の心境を尊いものと思つた。けれども、其處に甚だしい誇張と虚偽と不純の分子があることを見逃すことが出来なかつた。彼は七年前衆人の前に出て如何にも熱烈に辯解したり陽言したり誓つたりしなくては安心することが出来なかつたのは、未だ本當に自己を信ずることが出来なためであつたのだと思つた。孔子の「人に知られずして憤らず」といふ心境、耶穌の「誓ふ乍れ」といふ心境が、未だ理解されないためだと思つた。更に本當に自分を

信じ、本當にうちに充實を感じて居れば、決してそれを他に發表しなくとも不安を感じたり空虚を感じたりする譯がないのだと思つた。彼は今更のやうに、長たらしい書置を書いて自殺をする人の心事を陋劣だとも不徹底だとも思つた。彼は今更のやうに、沈黙の必要を絶叫する人の胸奥を淺薄と思つた。……

竹島の心に、もう微塵だも芝居氣はなかつた。彼はひたすらに自己の最深要求に殉しようと思つた。彼は只々彼自身のために彼自身の行くべき道を直往しようと思つた。彼は今こそ本當に毀譽褒貶を超越することが出来ると思つた。彼は今こそ本當に自己を信愛することが出来ると思つた。——彼は今こそ本當に沈黙することが出来ると思つた。

彼は勿論これまでとても、精神生活に就くものに對して「沈黙」の價值ある所以を知つて居た。教育者の教育者たる所以は、不言の感化訓陶にあ



ることを知つて居た。沈黙の實行であることを知つて居た。何等實際的效果ををさめることなしに、雑誌や會合などで意見を吐露することを得意とする様なことは、實際教育者の本領職分ではないと信じて居た。實際教育者の權威は、沈黙の實行と沈黙の感化にあることを知つて居た。彼は教育者の幸福とはこりとは沈黙中にあることを知つて居た。彼は只沈黙の必要と價值とを理解して居たばかりでなく、時々實際沈黙を試みた。けれども、其れは何か爲にする所がある、沈黙して居ることをほこりとするやうな虚偽の沈黙であつた。さうでなければ、未だ寂寞と不安と矛盾とを感じるだけ無理な不自然な沈黙であつた。

彼はかう思ふと、ふと嘗て自分が或る雑誌の上で「沈黙の權威」を説いたことを思ひ出した。そして急にそれを讀んで見たいやうな心持がしたので、押入をさがして、塵にまみれた一冊の教育雑誌を取出した。彼は、

久しぶりで幼な馴染に遇つたやうな懐しみを以て、靜かに讀んで行つた。

## 沈黙の權威

### (一)

黒雲が天を蔽うて、暴風亂雨が頃刻の後に破裂しようとする刹那の大海に面接する時に於て、私は自然の威力の強大である事を痛感せずには居られない。

吁沈黙の權威!!!あらゆる權威中最も高大なる權威は、實にこの沈黙の權威である。絶叫と多辯とは、多くの場合に於て吾々の自我の權威を高大ならしむるものではなくて、寧ろ之を損傷滅殺するものである。少くとも絶叫と多辯とをして自我の高大を増進せしめようとするためには、



一度先づ「沈黙の權威」の眞實と價值とを味讀しその必要を體達しなくてはならない。換言すれば、沈黙の具有する意義と價值とを十分に知悉し乍ら、尙且到底沈黙の洞穴の中に止る事が出来ない時に於てのみ、絶叫と多辯とは始めて吾々の眞實なる生活に對して有意義有價值なものとなるのである。事實に於て、吾々はコンコードの哲人エマーソンの言つたやうに、「語る事よりも黙して聞く事」に依つて一層十分な生の充實味を感じる事が多いではないか。

吾々人間の人格的價值は、多辯の時よりも沈黙の時に於て一屬自然に、一屬完全に表現せられるものである。人格の光は、即ち全體としての自我の權威は、沈黙の裡に自づと湧き出るその人の雰囲気であり、句であり、縁暈フリンダでなくてはならない。絶叫や多辯によつて表現された自我の價值は、全體としての自我の價值ではなくて、實は知能や態度や技巧やの

未梢的方面の價值である。沈黙の状態、靜止的狀態に居てだに尙且他人に對して名狀し難い「力」の感じを與へ侵し難い威力を保つて行くところにこそ本當の意味で人格の權威が存するのである。

私一個の眞實なる要求を披瀝するならば私はだまつて居たい。だまつて居ても空虚や寂寥や不誠實や虚偽を感じないやうになりたい。だまつて居ても、絶叫したり多辯を弄したりするに比して一層眞實な生活を營み、一層充實した生活を營み、一層自我を高大にする事が出来るやうになりたい。他人の毀譽褒貶などを聊かも意とする事もなく、沈黙して、併し乍ら極度に緊張して自己の信ずる生の大道をまつしぐらに進んで行きたい。さうだ。吾々の生命が極度に緊張した時には、到底言語を絶するものである事は、強烈な悲しみや喜びの際に於て吾々が不斷に經驗する事象ではないか。



私自身が眞實なる生活を生きる上に、沈黙の價值と權威とを認識し體達する事が私自身にとつて極めて必要であるとする事はいふ迄もなく、凡そ人が教育者として眞實なる生活を生きる上に於ても亦極めて須要である事を思はずには居られない。

たとへばこれを教授法の上から見てもさうではないか。多辯な教授者が必ずしも有効な教授をなし得るものではない。否、語り過ぎる事が却つて兒童の印象を散漫にし、感銘を稀薄にする所以である事は、吾々の經驗に徴して動かすべからざる事實である。所謂開發教授法といひ、所謂自學自習主義といふも、一面から見れば、要するに教育者の多辯とオセツカイとが教育の眞効果を損傷する所以である事を認めた結果に他ならないためではないか。この意味に於て、最も巧妙な教授者は、最も多く沈黙の機會を造るものであるといひたい。

多辯を用ゐずには爲し得ない管理は全然失敗の管理である。教授者が授業時間の始めに於て、教壇に立つた數秒間の無言の態度によつて、その時間の管理、随つて教授の効果の大半が定まるものである。兒童の騒ぎを制し得るものは、教師の鞭でもなく、教師の絶叫怒號でもなく、寧ろ數秒間の沈黙の生む權威の力である。此の意味に於て「沈黙の權威」を利用し得ぬ教師は、教育者として價值がない事はいふ迄もなく、未だ教授者たり管理者たるの資格をだに具へて居ないものであるといはなくてはならない。

## (II)

纏つて思ふに、沈黙の價值を最も十分に立證するものは演劇である。即ち俳優の眞の技倆は、せりふを語つて居る時よりも、寧ろ無言でしぐさ



をして居る時に一層十分に現はれるものである。否、それよりも寧ろ不言不動の時に最も十分に現はれるものである。俳優の所謂貫目といふ事はこの沈黙不動の權威を言現はしたものに他ならない。名優九代目市川團十郎はせりふに於ても、いぐさに於ても勿論卓越した技倆を持つて居た。但しこれらは他の俳優も真似て或程度迄彼に近寄る事が出来る。併し乍ら、彼の沈黙不動の姿即ち所謂「團十郎の腹藝」に至つては、到底他人の追隨を許さざる彼独自のものである。何となれば、これは目とか口とか、乃至は手足とかいふ部分的末梢や能力を働かして出来る技巧の力ではなくて、全體としての自我即ち全人格の力によつてのみ可能な事だからである。此の點から見て私は、嘗て島村抱月氏の「俳優の技藝を見るに言葉の表情は第一步である。動作の表情は第二步である。沈黙の表情は第三步である。完全な沈黙の表情に達した瞬間、最も深い意義を發揮し

て来る。」といふ言葉を思出さずには居られない。

教育者はある意味では一個の俳優である。随つて先づ言語と動作とを最も有効に、即ち最も教育的に使用し得る様に努力しなくてはならない。これやがて實地授業の練習とか、批評教授とか、授業參觀とかいふものゝ意義あり價值ある所以に他ならない。但し、これらの能力は勿論ある程度迄學んで到り得べきものである。併し乍ら、これらの技術をしてその十分な効果を發揮せしむる途はやがていふ所の沈黙不動の價值と權威とを味讀する事ではなくてはならない。即ち、自由に沈黙し自由に靜止する事が出来てのみ、始めて言語と動作とを最も有効に、即ち最も教育的に使用し得るといふ事が出来るのである。而して此の境域に到達する事は、單なる練習や單なる模倣に依つて可能な事ではない。何となれば、沈黙不動の權威は、技巧の結果や人爲の結果ではなくて、技巧と人爲と



を超越した人格それ自身の價值から自づと湧いて出る色なき「光」だからである。

而して教育者の沈黙の權威が最も十分に發揚せられるものは訓育の場合である事はいふ迄もない。訓育の眞義が「身を以て率ゐる」といふ點にあるならば、身を以て率ゐる事の秘訣は、沈黙の權威を體現する事に依つて被教育者に無言の感化を與へる事に存するといはなくてはならない。換言すれば、黙つて居ても人を動かさし得る様な人格的權威を具へ、黙つて居ても説明するに優る理解を與へ得る様な人格的光明を具へる事が、最も十分に訓育をして可能ならしむる秘訣である。自らを責める人でなければ、ほんたうに人を責め得るものではない。自己に無いものを兒童に求めやうとする時にのみ、多辯が必要である。自己の持つてゐるものを兒童に與へやうとする人でなければ眞の教育者ではない。そして自己

の持つてゐるものを與へるためには多辯は只害になるのみである。無言で與へよ！沈黙して導け！無言沈黙の間に抑へても壓しても自づと湧いて出る様な權威でなければ眞に人を感化する事が出来ない。而して、斯くの如き權威を具へるためには特殊な方法がなければならぬ。所謂根本的修養の必要な所以が蓋し茲に存する。

## (三)

眞實なものが凡て善であり美である。自己人格の核心を以て被教育者の核心に感化の火を點ずる事を生命とする教育者は、自己自身に對しても被教育者に對しても眞實性を失つてはならない。自己の衷心に於て信じ要求して居る様に偽つてはならない。確實に自我それ自身の内容となつて居ないものを、言語や動作を以て如何にも本當に「自己のもの」である



かの様に欺いてはならない。確乎たる自信と誠實だにもあるならば、言語や態度やで誇張する必要は断じてない。

近來、我が教育界にも言論が盛んになつて來たのは吾々の最も欣びとする所である。併し乍ら、これらの言論は眞の教育に對して果してどれ程存在の意義と價值とを有するであらうか。吾々から見れば教育者の言論には餘りに虚偽が多い、少くとも無用のものが餘りに多い様に思はれてならない。言はずには居られない程衷心の至情が醗酵した結果として自づとあふれ出た様な言論が果してどれ程あるであらうか。附和雷同でないもの、附焼刃でないもの、模倣でないもの、それがどれ程あるであらうか。彼等の言論の多くが生氣と力とに乏しいのは、要するに「自己のもの」でない他人のものを借用してわがもの顔に世をあざむくためではなからうか。

教育者は説教者ではない。教育者は文筆家ではない。更に教育家は學者ではない。教育者は實行者である。他を導き他を率ゐるものである。殊に、未だ頑是のない少年少女の魂を預るものである。随つて教育者が被教育者を偽る事は、彼等が兒童であるだけ、大人を欺くよりも一層罪が深い。

質實であれ、重厚であれ、眞摯であれ、熱誠であれ、敬虔であれ。輕浮なる銜氣と虚榮心とはこれら凡ての條項と矛盾する。而して不要なる多辯は大抵この銜氣と虚榮心とから生れて來るものである。教育界が生氣に富み華やかになりつゝある事は私も慶賀すべき兆候であるとするのではあるが、これらの中に、若し不幸にして輕浮なる銜氣と虚榮心とから生れた野次的分子が含つて居るならば、教育の進歩を阻害する事が極めて多大である。吾々は自己が多辯であるだけ多辯そのものを排するも



のではない。只吾々の極力排し諛はうとするものは、沈黙なるべき際に濫用せらるゝ多辯と、沈黙の權威を理解することなくして用ひらるゝ多辯とである。

## (四)

以上私は、主として言語上の沈黙の價値を説いて來た。併しながら、私の茲に力説しようとするものは單にこれに止らない。私は、寧ろ教育者に向つて廣い意味の沈黙主義の價値を高調しようとするものである。換言すれば、私は教育者に向つて精神生活内面生活の價値を高調しようとするものである。

私を以て見れば、現今の教育者は餘りに名譽心に富み、餘りに社會的勢力に憧れ、餘りに物質的幸福を望んで居る。即ち、彼等は教育の眞髓

は、教育者と被教育者との人格的交渉であることを忘却して、偏に自らを行政家や事務家の地位に置き換へようとするものである。實に、彼等は一人が十分に一人を感化し、一人が十分に一人を教育することが如何許困難なことであり、随つて又如何許尊嚴なことであるかを知らないのである。これ、彼等が人に知られることを望まずして、靜かに着實に自己の天職を果して居るものよりも、寧ろ嚴密な意味に於ける教育の効果を外にして、偏に華やかに、偏に外見をつくらはうとすることに努力するもの、乃至其の方面の効果の著しいものを一層價値ある教育者だとする所以に他ならない。

これに反して、沈黙するものは、多くは爲すなき姑息偷安のあきらめ主義者である。言はんと欲し、主張せんと欲しながら、只、言禍を恐れ筆禍を恐れるがためにのみ沈黙する卑怯者でなければ、左すべきか右す



べきかを精確に知ることのない優縦不斷の徒でなければ、凡てに亘つて意氣消沈し神身萎糜した老朽者である。即ち彼等は沈黙の價値を理解するがために沈黙するのでもなければ、沈黙することを要しないために沈黙するのでもなくて、只勇氣と自信と誠意とを缺くために、止むなく沈黙するか、爲にする所があつて沈黙するに過ぎないのである。而して斯くの如き沈黙が、教育者の生活に對しても教育界に對しても何等貢献する所がないのは改めていふ迄もない。

要するに、私が教育者に對して沈黙を要望するのは、内面生活精神生活の價値を理解せしめんがためである。内面生活精神生活に生すべき教育者の本領を會得せしめんがためである。内面生活精神生活に生きることを本領とする教育者たらんとするには、本當の意味の精神修養人格修養が必要であることを體達せしめんがためである。

思へば教育は自我と自我との抱擁である。愛がその極致に達した時に只魂の無言なる結合がある様に、教育に於ても亦多辯が勢力を占めて居るかぎりはその核心に觸れその妙境に參する事は出来ない。

吁沈黙の權威よ！之を味得した人に對してのみ只精神生活の門戸は開かれる。吁沈黙の權威よ！これを體達した人のみ本當の教育者たる資格を具へることが出来る。

彼はこれを読み終つて更に一層の心強さを覺えた。今日の自分の心が一年前の自分の心と同一であり、更に又七年前の自分の心とも流通して居ることを思ふと、彼には嬉しいやうな、そしてまた悲しいやうな、恥しいやうな、更にまた悔しいやうな感じがされてならなかつた。けれど



も彼は忽ち悲しさ恥しさ悔さに打ち勝つことが出来た。「本當の竹島は七年前も今日も同一である。只これまででは外界の誘惑と心の迷ひがこの眞實の我を、蔭蔽し我の眞實を振曲したのである、然るに、今は本當の自我が目覺めて來たのだ。本當の自我が復活して來たのだ。斯うして今こそ私は本當の自己自身の生活をする事が出来るのだ。」彼は心の中でかう獨語した。

竹島の心は生れてから始めて、磐石の上に座つたやうな安心を覺えた。生れてから始めて大地から生えたやうな確かさを覺えた。たとひ全體としての價値に於ては自分と世の所謂聖賢との間には千百萬里の差があるにしても、其の前に出て何等の不安も恐怖も感じないやうな心強さを覺えた。彼は直ぐに卷紙を出して左の手紙を二通認めた。——一通は彼の妻に對して一通は彼の弟に對してゝあつた。

多年に亘る私の虚偽の生活は今や根柢から破産した。それと共に私の眞實の生活は、新しい生活は、生き／＼と芽を吹いて刻々に力強い成長を續けて居る。私は最早確信を得た。私は事情の許すだけ速やかに當校を辭して郷里に歸る覺悟である。之までの野心を一切捨て、名もなき村學の先生として名もなき父の子として名もなき妻の夫として、一生を過すつもりである。此の決心によつて多年の苦悶は一切消されて私の心は今や光風霽月の感がある。實に今こそ私は何等の不安をも感ずる事なしに私自身を正視することが出来ると共に、おんみをも、否、一切の人をも正視することが出来る。吁喜ばしい復活の時が遂に來たのだ。墮落の深淵に陥んだ私は救はれたのだ。私の喜びは譬へるにものがない。



そして私は、この喜びをおんみに告げるとを何よりも私の喜びとする所である。否、私はこの心的大轉機精神的大革命が偏におん身の私に對する愛の力に依ることが多いことを衷心感謝することを喜びとするものである。たとひこの喜びをわかつ日が遅くとも、おんみは決して私を責めはしないであらう。否、これまでの凡てを宥して心から私の喜びを喜びとして呉れるであらう。いひたいことは山々ある。けれども詳細は後便に譲つて、今は只取敢へずこの欣ばしい消息を傳へるに止める。どうぞ私の言葉を信じて、私の幸福とおん身の幸福とのために、祝盃を舉げて下さる。

彼はこの手紙を出して仕舞ふと、心が一段軽くなつたやうに思はれた。

けれども、彼の心の一隅にはいふべからざる苦悶と悲哀とがどす黒くこびりついて居た。彼は餘りに彼自身を思ふことに熱中し過ぎた。彼は彼の一身を潔うするため、他を思ふ暇がなかつた。彼は彼一身の都合から間もなく捨てられる彼の教へ子を思ふと、苦しさに息づまるやうな感じがした。彼は自分のこのたびの決心と行動とを、何人に對しても疚しいとは思はなかつた。けれども、彼は彼の教へ子に對しては濟まないと思つた。廣いこの世界の中で、はしなくも運り合ひ、たとひ三四年の間でも師と呼び弟子と呼んで、愛し愛されて居たものが、斯うして私のためにまた離れて了つて、この後永久にこの關係が斷たれることを思ふと、彼はいはうやうのない果敢なさを感じるのであつた。彼の心は痛切に彼を責めるのであつた。

「これまでの自分は、たとひ本當に自覺的に彼等を愛して居たとはいへ



ないにしても、自分の彼等を愛せんとする意志は純真であつた。熱烈であつた。その點では、私は彼等に對して何等恥づる所がない。何等疚しい所がない。そして彼等も亦私を師として敬愛して居た。私がこれまで教師としての幸福を感じて居たのは、實に彼等あるがためであつた。彼等に愛されて居たからであつた。彼等を愛して居たからであつた。私はこれ迄は勿論、自分の非を悟つた今日とても彼等に對して何等の不滿も感じては居ない。若し出来ることならば、この新らしい決心で本當に彼等を愛したい。本當に彼等を愛することによつてこれまでの罪を贖ひたい。だから私は、私一身の都合のために自ら彼等を捨てることは心苦しい、けれども、私一身の都合といふのは、世の常の所謂便宜や都合といふやうな表面的な、心の持ちやうではどうにでもなるものではない。否、私にとつては實に死生の追分である。何を捨て、も解決しなくてはなら

ない根本問題である。私は、今は靜かに外を見るやうなのんきな地位に置かれては居ない。他人のために全力をつくすことが出来るやうな餘裕のある境遇に立たされては居ない。私は何を捨て、も先づ私の最深要求に従はなくてはならない。何に反いても先づ自分を大切に護らなくてはならない。若しも私が自分の安逸を貪るために彼等を捨てるのであるならば、如何程重い罪科に行はれてもよい。けれども、私の今行く道は、表面まことに穩かであるやうであるけれども、實は最も苦しい道である。退くやうに見えながら進んで行く私の生の行路程苦しいものはない。私は全く破産したのである。私は今再び全く新らしい生の殿堂を建てようとするのである。自分以外の人には誰からにもはつきりと見えないうやうな殿堂を建てようとするのである。私がこのまゝ茲に止ることは私に取つて最も容易いことである。けれどもそれは出来ない。私は、こ



れまでの私自身をさへも捨てたのではないか。私の今日こそ本當に「オライオン凡てか無か」の境に立つて居るのだ。私は凡てを獲るために、一度は何ものをも捨てなければならぬ地位に立つて居るのだ。教へ子を捨てるのも私の單なる便宜や快樂のためではない。私は私の命には代へられない。私は私の本當の生活には代へられない。……」

竹島は再び元の軽い心に返つた。けれども、彼の眼は熱涙で一ぱいになつて居た。

## 一〇 復 活

竹島は翌日いつものやうに學校に出た。彼の外面には何等の變化も見えなかつた。けれども其の胸奥には甚だしい變化が生じて居た。彼は今更のやうに痛切に教育者の虚偽と不誠實とが感じられた。彼は今更のやうに強烈に虚偽と不誠實とを自覺しなかつたこれ迄の自分が詛はしく思はれた。で彼はたとひ半日でも一日でも、自分の良心に對して疚しくないやうな言動をしようとした。けれども彼は間もなく其處に幾多の矛盾と困難とがあることを見出した。彼は校長はじめ同僚の顔を見るのが恐ろしいやうに感じられた。少しでも真面目に彼等と交渉すれば、其處に忽ち血の雨を降らさなければ止まないやうな激しい反感と憎惡とを感じた。けれども彼は出来るだけ心を平靜にして、自分の主力を教へ子を愛



することに注いだ。

その間に彼の轉任の交渉が着々と進捗した。始めは彼の話を真に受けるものがなかつたが、それが彼の衷心の希望であり、磐石のやうな決心であることが理解されると、皆同じやうに、「さういはれて見ると、私などはあなたに合せる顔がない譯ですわ」といつて眞顔になるのであつた。

やがて遂に時が來た。彼は愈々光榮ある〇〇市第四小學校長候補の地位を一擲して、僅か六學級しかない彼の郷里の學校長に轉ずることになつた。彼は村の吏員や縣郡の當局者にはかつて一身上に落度のない限り少くとも今後二十年だけは轉任をしないと云ふ内諾を得て轉ずることになつたのである。

彼が轉任の噂は間もなく方々に傳はつた。そして噂は噂を生んで、あらゆる風説さへも大膽に而かも如何にも事實らしく好奇心に富む人々の口から口に、耳から耳に傳へられた。一平訓導の轉任としては、彼の轉任の噂は不相當に激烈であつた。併しそれには相當の理由があつた。

新設小學校の建築が進むに従つて、其の校長の人選が〇〇市教員社會の注目を惹いた。新聞紙は幾度か其れに就いての噂を傳へた。そして數ある候補者の中、竹島訓導の呼聲が一番高かつた、併し、或る新聞紙は政治上の黨派的關係から、校長になりたければかりで醜聞の高いそして勢力のある市學務委員の月岡に取入つて、百度を踏んで居ると云ふ理由で竹島の人格を極力非難した。そして竹島は自分の受持つて居る月岡の長男に依姑の沙汰をするといふやうな事實をさへも附け加へて報導した。

然るに學校の工事が完成に近づいた頃竹島の轉任事件が起つた。而か



もそれは世間から見ても如何にも突然の出来事であつた。殊に、表面上何等の理由もなく、自ら請願して、たとひ自分の郷里とはいへ、あれ程の地位を捨て、加之に俸給が二級も下つて轉ずるといふやうな未曾有のものであつた。さなきだに最近注目的となつて居た彼のこの餘りに突然にして餘りに異常な轉任は、疑心暗鬼を起さしめるに十分であつた。

「何か不平があつて、やけに退隱するのだらう。」

「月岡の子と磯田の子とが學校で喧嘩をした時に、竹島が磯田の子の肩を持つたゝめに、月岡が立腹して新設學校の校長に推薦することを斷つたのだ。」

「月岡と竹島とはこの度の事件で醜關係を結んだことが、當局や警察の耳に入つたので、二人が急に狼狽して竹島が犠牲になることになつたのだ。竹島が月岡の子を所罰しようとしたのも、實は月岡と相談の上

に演じた一場の芝居に過ぎない。」

「竹島が敏腕で三隅校長が老朽なために、ふだん中が悪いのに、二人が〇〇といふ若い美しい女教員を張り合つて竹島の方がとゞく勝ちを占めたために、一層中が悪くなつて、長い間暗闘して居たのが、遂近頃の毆打事件で曝發するやうになつた結果、校長は其の女と竹島との關係を表沙汰にすると云ふやうなことがあつたのが、一番主な原因だ。」

「近頃急に競争者が出て来て、竹島が、どうやら新設學校の校長になれさうにもなくなつたのが不平のもとだ。」

「兩親が老病で彼を無理に郷里に引き寄せたのだ。」

「東京に居る竹島の弟が竹島に中等教員になることをすゝめて、校長になることに反對したゝめに、暫く田舎に引き込んで試験勉強するつもりだらう。」



「竹島は肺が悪いために、空氣のきれいな田舎に歸つて静養するつもりださうな。」

新聞紙上に傳へられた竹島の轉任の原因は大部分彼のためには不利なものであつた。そして、何れも彼が辯解すれば其の非を匡すことが出来るものであつた。けれども、彼は勿論一片の取消だも正誤だも出さなかつた。で彼の知人が彼の過ぎたる温厚を怒つて彼に取消状を出すやうに忠告するものも少くはなかつた。けれども、彼はいつも寂しい微笑を湛へてその忠告に従はうとはしなかつた。そして彼は幾度も「私が不徳だから止むを得ない」を繰り返した。時には、「新聞紙の出たための記事位で傷つけられるやうな人間なら本來其の人間が弱いんだ」など、激語することもあるが、大抵は何等辯解がましいことはいはなかつた。で、親切に忠告する人も遂には彼に對して反感を懐いたり、甚だしきは、「若しや新

聞紙上の記事が事實ではないかしら？」など、疑ふものさへないでもなかつた。けれども彼の心も、彼の態度も平静であつた。彼はこの位のことでは沈黙を破るやうでは、到底長い間沈黙して田舎で暮すことなどは出来ないと思つた。そして彼は實際何等の辯解をしないでも不安を感じないやうになつた昨日今日の自分を嬉しいものと思つた。併しそれと共に、彼は人の心事の輕薄を嗤ひ皮相を憐れみ陋劣を憎み不誠實を詛はずには居られなかつた。そしてこの嗤笑、この憐愍、この憎惡、乃至この咒詛は決して自分一個の利己から起つたものではなくて、人間として當然なすべきものだと思つた。けれども彼は凡てを忍んだ。只彼は、校長と一女教員を競つたとか、月岡と醜關係があるとかいふ記事に對しては流石にしみじみと世の味氣なさを感ぜずには居られなかつた。そして一刻も速くこんな陋劣な所を去りたいと思つた。こんな醜惡なことに尊い



心力を勞することから免れたいと思つた。

斯くして彼の歸心は矢の如くになつた。彼の目には斷えず美しい妻の顔が見えて居た。可愛らしい二人の子の顔が見えて居た。懐かしい山や水が見えて居た。静かな、清い、氣高い、そして晴がましい心持で何等の煩ひも何等の拘束も受けずに、精一ぱい教育のために力を盡すことの出来る時が刻一刻に近づいて來つゝあることを考へると、彼の心はいはうやうなくときめくのであつた。

勿論、人一倍多感な彼には心残りがあつた。心苦しさがあつた「そしてその一番大きな苦悶は依然として教へ子を自ら捨てゝ行くといふことであつた。たとひどんな理由であるにしても三年來育んで來た教へ子を捨てゝ行くといふことは彼にとつて甚だしい苦痛であつた。教へ子である限り、どんな者でも自分にとつて大切な者である點では何等の變りが

ないと思ふと、あれ程確い決心をして居ながらも、流石に是を捨てゝ彼に就く自分が如何にも冷酷な如何にも輕薄なやうに感じられてならなかつた。彼はせめて轉任するまでいゝから何を捨てゝも、教へ子に對しては自分の全力を盡さうと決心した。只の一日でも只の一時間でも全力を盡して熱心に教育することは、不真面に十年教育するよりも勝つて居るのだと考へた。一旦自覺したかぎり、そして其處を去らない限りは、どんな悪い條件の所でも自分の全力を盡して、自分に對して恥しくないやうにしないでならぬ。本當に誠實に生活しようとするものは明日を思つてはならない。只目前の刹那々々を愛惜し、刹那々々を誠實に生きなくてはならない。時や所によつてよりよく生きようとする誠意が左右されるやうであつてはならない。誠意によつて時所を左右しなくてはならない。少ゝとも時所に應じて誠意が其の最善の力を發揮するやうで



なくてはならない。……

彼はかう思ふと、只の一刻でも自分を忽かせにすることが出来なかつた。彼は「刹那に永遠を見る」といふことが始めて十分に理解されたやうに思はれた。そしてさう思ふと、校長を始め澤山の同僚達の不真面目さが益々彼の心に堪へ難いものとして映じた。輕薄な、皮相な、ごまかしの彼等の人間や生活がたまらなく彼の心を刺戟した。彼は自分の去るや否や、自分の教へ子が——たとひ、五日でも十日でも真面目に教育した自分の教へ子が、このやうな輕薄な不真面目な人達の手で傷つけられるのかと思ふと、いはうやうなく悲しかつた。彼は終業後を利用して毎日四十幾人かの受持兒童の家庭を訪問して、父兄にその兒童に關する必要なだけの注意なり感想なりを忌憚なく話しもし且相談もした。けれども彼は自分の轉任の動機や理由については磯田の兩親以外には只の一言も語

らなかつた。そして彼等に對しても確く口外してはならないと依頼した。彼は只新聞紙などに傳へられたやうな事實と相違した理由で彼に望むものがある時には、彼は只これを否定するだけであつた。

やがて、事務引繼も終つて愈々明日は出發といふ時になつた。その夜送別會が川に面した某樓の大廣間で開かれた。送別會については、彼は極力其の無用を説いて辭したが聞き入れられずにとう／＼開かれることゝなつたのであつた。それは一訓導の送別會としては稀に見る盛會であつた。

三隅校長は發企者を代表して開會の趣意を述べた。型の如き挨拶が終つてから、彼は竹島訓導轉任の動機に關する世間の噂について一場の辯解を試みた。

「……竹島君と私とが何だか面白からぬ關係があつたらしくいふ新聞紙